

島根大学考古学研究室調査報告第8冊

西谷2号墓発掘調査報告

出雲市大津町所在弥生墳丘墓の調査

2006

島根大学法文学部考古学研究室

出 雲 市 教 育 委 員 会

島根大学考古学研究室調査報告第8冊

西谷2号墓発掘調査報告

出雲市大津町所在弥生墳丘墓の調査

2006

島根大学法文学部考古学研究室
出雲市教育委員会

A Report of the Excavation of
NISHIDANI No.2 YAYOI BURIAL MOUND
in Izumo City

2006

Department of Archaeology, Shimane University
Izumo City, Shimane Prefecture, Japan

SUMMARY

Nishidani No.2 Burial Mound is located on the northern part of Nishidani Hills in West Izumo region. Though the greater part of the mound has already been destroyed, the original one is estimated to be a large 'four-horned' rectangular mound measuring 34 meters by 24 meters in plan and 3.5 meters in height. On the top of the extant mound we found a trace of a pit burial, the bottom of which was covered with red clay or cinnabar. But it is considered as secondary, because it is too far to the end of the original mound. The foot of the mound is skirted with elaborate structure making use of a great many boulders, and we revealed it in some trenches. A lot of potsherds and a few glass ornaments were found out of the disturbed soil, and most of potsherds are those of ritual pots and pot-stands imported from Kibi district, verifying the relationship between Izumo and Kibi chieftains in the Late Yayoi period.

序

出雲市大津町の西谷墳墓群は、私たちの研究室が発足後間もない頃に総力を挙げて発掘調査をした、記念すべき遺跡である。その遺跡に12年を隔ててまた向かい合うことになったのであるが、その間に一帯は国の史跡に指定され、史跡公園「出雲弥生の森」として整備されることになったのみならず、ここに市立博物館を設立する構想も具体化しつつある。西谷墳墓群をめぐるこのような変化は、かつての私たちの発掘調査がきっかけとなっているわけで、それはそれとして喜ばしいことではあるが、一方で、かつての調査が木漏れ日の中で行われたことを思うと、木々を伐採して進行する公園化に戸惑いを覚えるのも事実である。

さて今回の発掘調査は、墳墓群の保存活用のために出雲市が進めていた確認調査の一翼を担う形で実現した。私たちが主として担当した2号墓は半壊状態ではあるが、それ故に将来の公園化に際して復元展示を行う墳墓の候補となっていた。そのためこの墳丘墓については特に詳細なデータを把握する必要があり、やや入念な調査を実施することになったのである。

調査は予想を遙かに超える成果を生んだ。意外にも本来は大型の墳丘墓であったことが明らかとなり、埋葬施設の痕跡が突き止められ、大量の吉備の特殊土器が出土し、副葬品の一部を回収することもできた。これらの成果は、当地の弥生墳丘墓研究に大きく寄与するのももちろんあるが、史跡公園計画や博物館構想にも活かされて市民の共有財産になることが期待されよう。

末筆ながら、さまざまな形で調査にご協力いただいた地元の方々、出雲市文化観光部、別けても、かつての調査時と同じように宿舎を提供され何くれとなく厚意溢れるお世話をいただいた亀淵山西光寺のご住職 吉田禪教師に、心から感謝の意を捧げるものである。

2006年9月

島根大学法文学部考古学研究室

渡辺 貞幸

大橋 泰夫

山田 康弘

例　　言

1. 本書は島根大学考古学研究室が2004年度に実施した出雲市・西谷2号墓の発掘調査報告であるが、以下に記すような経緯を踏まえて、出雲市の承認を得て同市が2005年度に刊行した「西谷墳墓群－平成14～16年度発掘調査報告書－」のうち2号墓に関する部分の別刷りを一部改変して作成した。
2. 島根大学の調査は、西谷墳墓群の整備活用のため出雲市が実施していた発掘調査の一部を分担する形で、その最終年度の2004年8月23日から9月13日まで、2号墓において実施した。島根大学は主として墳丘残存部における埋葬施設の調査、北側墳裾部の配石構造の調査、および墳丘西側裾部のE区・G区の発掘を担当した。また現場調査後は、上記発掘担当部分の報告作成のほか、吉備の特殊土器を主体とする出土土器の整理および実測の作業を担当した。これらの作業は授業科目「考古学実習II」の一環として実施した。
3. 以上のような事情のため、本書には一部に島根大学が直接関わっていない調査区の報告も収録されている。また、出土品についての最終的な図の浄書と記載は、出雲市文化観光部文化財課において作成された。
4. 2号墓の発掘調査および本書収録部分の編集には、島根大学の渡辺貞幸と出雲市文化観光部の坂本豊治が協力して当たった。報文文末に氏名を記した部分は島根大学学生によるものであり、自余の部分の文責は坂本豊治であるが、末尾の「調査成果」の記述は坂本と渡辺の討論に基づいている。英文梗概等は渡辺が作成した。
5. 西谷2号墓の地籍は、出雲市大津町下原字西谷3596-6ほかである。
6. 本書で使用している2号墓の測量原図は、1988年に島根大学考古学研究室が作成したものである。
7. 掘出方位は調査時における磁北を示す。座標を記したものは国土交通省告示第九号による平面直角座標系Ⅲ系の座標値を示すが、原点の経緯度は日本測地系によっている。
8. 出土品および図面・写真類は出雲市文化観光部に保管されているが、島根大学が担当した遺構の写真は島根大学でも保管している。
9. 調査に当たっては、多くの方々の暖かいご支援を受けた。特に、宿舎とさせていただいた亀淵山西光寺の吉田禪教師には深甚の謝意を捧げるものである。

発掘調査参加者（島根大学関係）

會下 和宏、片山 尚子、客野 祐治、久保田由希、鈴木 小織、千葉 淳美、
中村 佳珠、中村 優子、錦織 崇、三井 修、村上 達郎、百田 麻、
山田 康弘、山室瑠理枝、渡辺 貞幸

整理作業参加者（島根大学関係）

片山 尚子、客野 祐治、久保田由希、鈴木 小織、千葉 淳美、中村 佳珠、
中村 優子、錦織 崇、村上 達郎、百田 麻、渡辺 貞幸

第1章 位置と環境

第1節 西谷墳墓群の位置（図1）

西谷墳墓群が所在する地緯は、島根県出雲市人津町3598-1ほかである。遺跡の所在する出雲市は出雲平野と北の島根半島北山山系、南の中国山地からなる。出雲平野の西側の日本海沿岸部には砂丘が南北に伸びている。

西谷墳墓群は斐伊川が中国山地から出雲平野に流れ出る出雲の西岸をなす丘陵の尾根上にある。この丘陵は斐伊川の扇状地の扇頂付近に位置し、その尾根は斐伊川河床から約40m高くなっていて、ここからは出雲平野を見渡すことができる。

西谷に墳墓が築かれた弥生時代から古墳時代頃の出雲平野は、斐伊川が西流して入海（奈良時代の「神門水海」）に注いでいた。また、宍道湖の西端も現在より西にあったと考えられている。現在の地形に近い形に定着したのは江戸時代以降で、中国山地の製鉄の「鉄穴流し」によって、土砂流入量が増大したため、斐伊川は東流し宍道湖に注いでいる。斐伊川が注いでいた入海は現在神西湖としてその名残がみられる。

第2節 歴史的環境

縄文時代

現在出雲平野で知られている早期末の遺跡として、出雲平野西部の砂丘下にある上長浜貝塚（27）や菱根遺跡（31）がある。続く前中期では、斐川町の上ヶ谷遺跡（53）が確認されているのみである。その後の海退が進んだ後晩期の遺跡が近年の発掘調査によってわかってきてている。三田谷I遺跡（9）、後谷遺跡（49）、矢野遺跡（34）、原山遺跡（30）、出雲大社境内遺跡（28）などがあげられ、集落の増加がみられるが遺構の確認は少ない。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡は縄文晩期から続き、特に三田谷I遺跡（9）、矢野遺跡（34）で多くの遺物が出土している。

中期から後期にかけては入海周辺の集落が飛躍的に増大し、大神遺跡（36）、古志本郷遺跡（13）、下古志遺跡（18）などの大規模集落が出現する。これらの遺跡は集落に多重の溝を配置するものがみられ、平野で生活する上で水の処理が大きな問題であったことがわかる。

出雲平野の南東の丘陵地には大量青銅器埋納で知られる神庭荒神谷遺跡（51）や加茂岩倉遺跡があり、出雲の各集落がまとまっての共同体祭祀が行われたと考えられる。

墓制では、前期の配石墓で知られる原山遺跡（30）、中期中葉の中野美保遺跡（42）の貼石墓、中期末頃の青木4号墓（46）、そして、弥生後期後葉～終末にかけての大規模な四隅突出型墳丘墓で知られる西谷墳墓群（1）がある。

古墳時代

古墳時代になると弥生時代の大規模集落が急激に衰退するといわれてきたが、近年の発掘調査では、古墳時代前期～中期の遺構・遺物の出土が増えつつある。

前期の古墳としては、景初3年銘鏡が出土した神原神社古墳、前方後円墳の大寺古墳（47）や筒型銅器が出土した山地古墳（22）が知られている。西谷墳墓群（1）では西谷7号墓や西谷21号墓、西谷18号墓があり、弥生時代よりは規模が縮小するが継続的に墳墓が築かれる。

中期の古墳としては北光寺古墳（23）、草原古墳（54）、神庭岩船山古墳（50）があげられる。今回の発掘調査により西谷11号墓も円筒埴輪をもつ中期の古墳であることがわかった。

後期後半以降になると、今市大念寺古墳（41）、上塩冶築山古墳（7）などの出雲地方最大級の横穴式石室を有する大古墳が築造される。また、南の丘陵には上塩冶横穴墓群（5）、神門横穴墓群（21）などの大規模な横穴墓群も築かれる。

奈良時代・平安時代

官衙施設の関連と考えられる遺跡として、古志本郷遺跡（13）、三田谷I遺跡（9）、天神遺跡（36）、後谷遺跡（49）、鹿藏山遺跡（29）、青木遺跡（46）などがあげられる。また、仏教関連遺跡として、神門寺境内廃寺（6）、長者原廃寺（2）、天寺平廃寺（52）などがあり古代寺院が建造される。そして、石橋をもつ光明寺3号墓（10）や小坂古墳（11）などの初期火葬墓が神戸川周辺で多く見られる。

表1 周辺の主な遺跡一覧

1	西谷墳墓群	19	宝塚古墳	37	海上遺跡
2	長者原廃寺	20	知井宮多聞院遺跡	38	小山遺跡
3	肯沢古墓	21	神門横穴墓群	39	藏小路西遺跡
4	長堀遺跡・権現山古墳	22	山地古墳	40	姫原西遺跡
5	上塩冶横穴墓群	23	北光寺古墳	41	今市大念寺古墳
6	神門寺境内廃寺	24	庭反II遺跡	42	中野美保遺跡・中野西遺跡
7	上塩冶築山古墳	25	御領田遺跡	43	荻杵古墓
8	地藏山古墳	26	二部竹崎遺跡	44	里方別所遺跡
9	三田谷I遺跡	27	上長浜貝塚	45	山持川川岸遺跡
10	光明寺3号墓	28	出雲大社境内遺跡	46	青木遺跡
11	小坂古墳	29	鹿藏山遺跡	47	大寺古墳
12	朝山古墓	30	原山遺跡	48	斐伊川鉄橋遺跡
13	古志本郷遺跡	31	菱根遺跡	49	後谷遺跡
14	大梶古墳	32	井原遺跡	50	神庭岩船山古墳
15	川畠遺跡	33	白枝荒神遺跡	51	神庭荒神谷遺跡
16	妙蓮寺山古墳	34	矢野遺跡	52	天寺平廃寺
17	放れ山古墳	35	壱丁田遺跡	53	上ヶ谷遺跡
18	下古志遺跡	36	天神遺跡	54	草原古墳

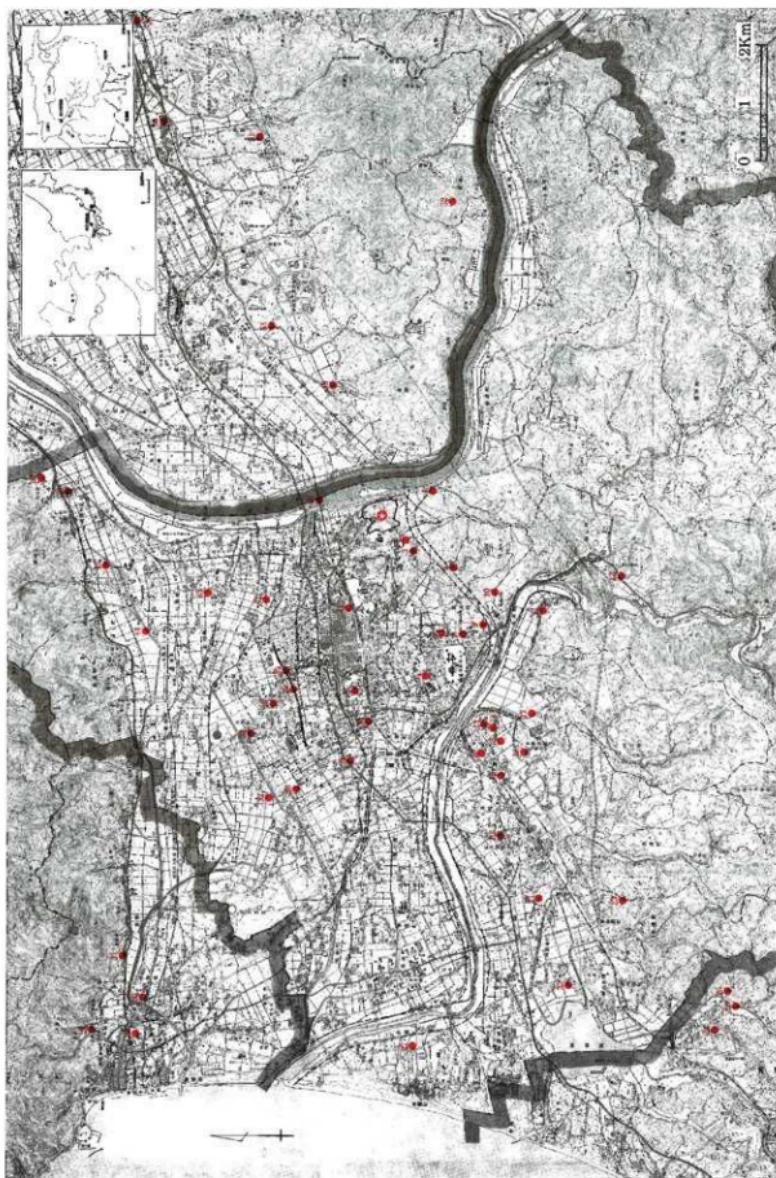


図1 出雲平野の主要遺跡分布図 (1 : 7500)

第2章 西谷墳墓群の概要

第1節 西谷墳墓群の調査と整備の歴史（図2・3・4）

西谷墳墓群の発見は、1953年に西谷1号墓の開墾中に多量の土器が出土したことによる。その後、1958年に池田満雄氏が上記の遺跡と遺物を「下米原西谷丘陵出土土器」として報告した。1971年に東森市良氏により下米原西谷丘陵出土土器に吉備型器台・壺があることが指摘される。

同年、西谷墳墓群の西側の谷（兎谷）が島根県立商業高校敷地として造成されることとなり、島根県教育委員会が分布調査し、西谷1号墓を確認した。翌年の1972年に西谷1号墓が崩壊する恐れがあるとして、出雲市教育委員会が緊急発掘調査を実施し、西谷1号墓が四隅突出型墳丘墓であることがわかった。併せて、番外1号墓、番外2号墓の調査を行い、米原古墳群として報告した。

同年1972年になり大きな墳墓と考えられる西谷8号墓が敷地造成により調査前に破壊される。

その後、1980年までに島根県教育委員会と出雲考古学研究会により2号墓～14号墓を発見し、墳丘測量が行われている。その成果が1980年に出雲考古学研究会により『古代出雲を考える2 西谷墳墓群』として報告される。この時に、来原古墳群から西谷墳墓群へ遺跡名が変わっている。この報告は、西谷墳墓群の各墳墓の検討を行い、西谷墳墓群の保護及び指定を求めるものであった。現在、西谷墳墓群は国史跡となって出雲市教育委員会が史跡の整備を行っているが、その出発点はここにあるであろう。また、1号墓、2号墓、3号墓、4号墓、6号墓、9号墓の6基を四隅突出型方形墓として、これらが弥生墓であることを指摘した重要な報告である。

1983年から1992年にかけては、島根大学考古学研究室を中心とした調査団によって西谷3号墓の発掘調査が行われている。埋葬施設の調査では、ガラス製の勾玉・管玉・鉄劍などが副葬され、葬送儀礼に使用されたと考えられる大量の土器が出土している。また、第4主体に伴う柱穴が確認され、葬送儀礼に伴う墓上施設があったと考えられている。貼石の調査からは、突出部上面が面状をなすことがわかり、四隅突出型墳丘墓を復元する際の大きな成果となった。併せて、主要な墳墓の詳細な墳丘測量図も提示されている。この報告のなかで、9号墓西側にも3基の方形台状のマウンドが存在していることを指摘している。これが、後に18号墓、19号墓、20号墓と呼んでいるものである。

1991年～1992年にかけては、簸川南地畠広域農業圏地能動整備事業に伴って、農道ルート上に15号墓、16号墓、番外4号墓が新たに発見され発掘調査が行われた。15号墓は古墳時代中期後半の方墳で、16号墓は古墳時代前期末～中期にかけての円墳で、朝鮮半島産のタビが出土している。調査後、これらの墳墓は農道工事によって破壊されている。

その後、1996年出雲市は歴史・民俗資料等保存活用に関する検討委員会を発足させ、西谷墳墓群を国指定史跡化、史跡整備を進めることを決定した。

翌年の1997年には島根県教育委員会が開催した「古代出雲文化展」で、西谷3号墓が展示のメインの1つとして注目を浴びた。また、同年に出雲市、斐川町、加茂町が「文化財を活かしたモデル地域」として全国10ヶ所のうちの1ヶ所に選定され、出雲市は「王墓の里ゾーン」として西谷墳墓群、今市大念寺古墳、上塙治塗山古墳、上塙治塗山古墳を主な文化財とし、その中核となる遺跡を西谷墳墓群とした。また、拠点整備として古代出雲王墓館（仮称）の建設を計画した。

出雲市教育委員会は西谷墳墓群を国指定史跡にするための基礎調査として、1997～1998年にかけて墳墓群全域の詳細測量調査を行っている。この調査により、21号墓～26号墓を新たに発見し、墳墓群全体の基礎資料が整ったと考えられる。

1998年～1999年には、出雲市教育委員会が内容確認調査を行った。特に、2号墓は大型の四隅突出型墳丘墓であることがわかり、配石構造も2段であることがわかった。また、他の墳墓の時期や規模もわかってきて、新たに27号墓も発見している。

以上のような経過を経て、2000年3月30日に西谷墳墓群の四隅突出型墳丘墓に關係する部分36,000m²が国史跡になった。そして、同年に西谷墳墓群等整備検討委員会、2001年には西谷墳墓群整備指導委員会を開催し、『西谷墳墓群史跡公園整備基本計画書』ができた。

現在は、西谷墳墓群は一部を公有地化し、園路や便益施設の整備を行って、2004年4月29日に西谷墳墓群史跡公園「出雲弥生の森」としてオープンしている。また、古代出雲王墓館（仮称）基本計画も策定し、整備を進めているところである。

同史跡指定後も2002年～2005年にかけて、出雲市教育委員会は更なる西谷墳墓群の内容確認調査及び保存修理に伴う発掘調査を行った。この調査の報告が本書である。

以上のように、西谷墳墓群は出雲市の文化財活用の中核遺跡となってきている。現在、墳丘を有するもの27基、墳丘を有さないもの5基以上あり、弥生時代後期後葉～古墳時代中期後半にかけて統統的に墳墓が築造された遺跡であることがわかってきた。特に、弥生時代の四隅突出型墳丘墓が6基あり、その内の2号墓、3号墓、4号墓、9号墓が大型の墳丘墓である。

【参考文献】

- 池田満雄1958「下米原西谷丘陵出土土器」「出雲市の文化財」第1集 出雲市教育委員会
- 東森市良1971「九重式土器について」「考古学雑誌」57卷1分
- 門脇俊彦1972「また出た発生期の古墳」「季刊文化財」17号
- 川雲考古学研究会編1980「西谷墳墓群」古代の出雲を考える2
- 渡辺貞幸他1992「西谷墳墓群の調査（I）」「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」島根大学考古学研究室
- 出雲市教育委員会編1993「簸川南地区広域営農用地農道整備事業に伴う西谷15・16号墓発掘調査報告書」
- 島根県教育委員会編1997「古代出雲文化展—神々の国 悠久の遺産」
- 出雲市教育委員会編1998「西谷墳墓群測量調査報告書」
- 出雲市・加茂町・斐川町編1998「計画名：古代出雲王国の里」文化財を活かしたモデル地域づくり推進計画
- 出雲市教育委員会編2000「西谷墳墓群—平成10年度発掘調査報告書—」
- 西谷墳墓群等整備検討委員会編2001「西谷墳墓群整備検討委員会提言書」
- 出雲市編2002「西谷墳墓群史跡公園整備基本計画書」
- 古代出雲王墓館（仮称）基本計画策定委員会編2005「古代出雲王墓館（仮称）基本計画」

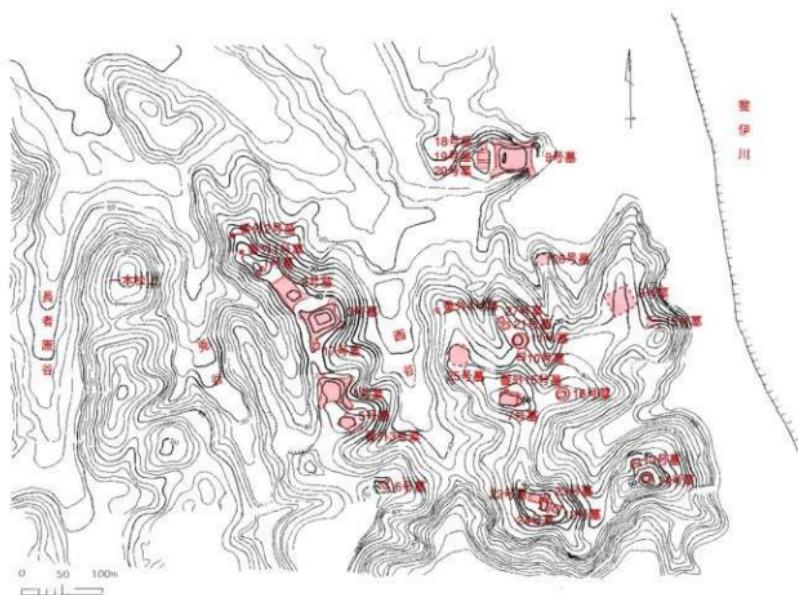


図2 西谷丘陵周辺の旧地形（渡辺貞幸他1992を改変）（1：6000）

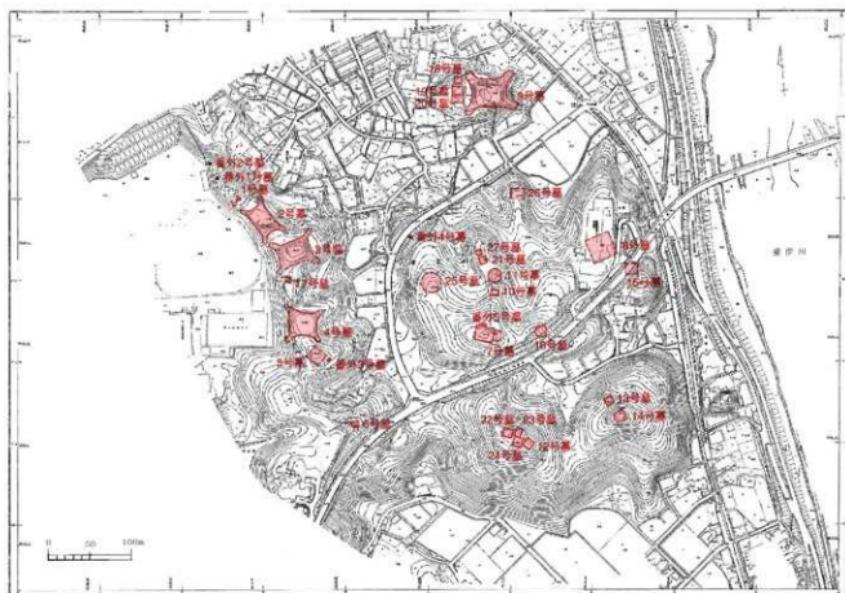


図3 西谷墳墓群分布図（1：6000）

第3章 調査の概要

今回の発掘調査は、西谷墳墓群の解明を目的とした。平成12年3月に当遺跡は国指定史跡となったが、指定範囲は四隅突出型墳丘墓が確認されている丘陵のみで、それ以外の古墳群は指定範囲外である。西谷墳墓群の全体が史跡に指定されなかった背景として、小規模古墳群であることと、その内容がほとんどわかつていなかったためである。また、指定地内の四隅突出型墳丘墓にても、その全容がわかつっている墳墓は島根大学考古学研究室が調査した西谷3号墓、1972年に出雲市教育委員会が緊急調査した西谷1号墓のみである。このように一部が史跡である西谷墳墓群は不明な点が多く、今後の史跡の保護・活用のために、各墳墓の調査の必要性を強く感じていた。そこで、墳丘規模と形態、築造時期の確認を主な目的とし、トレンチ及び崩落断面確認を基本とした調査を実施した。調査を実施した墳墓は、2号墓、4号墓、6号墓、9号墓、10号墓、11号墓、17号墓、18号墓、19号墓、20号墓、21号墓、25号墓、26号墓、27号墓、14基の墳墓である。また、1972年に調査を実施した1号墓、番外1号墓、番外2号墓の正確な位置を確認するために、再発掘調査を行った。

墳墓の確認調査の他に、墳墓の保存修理を目的に2号墓、4号墓、9号墓の発掘調査を実施した。2号墓と4号墓は墳墓の復元を目的とした発掘調査を実施し、9号墓は崩落崖面保護工事の事前確認調査として発掘調査を実施した。

特に、平成16年8月23日～9月13日までの約3週間は、島根大学考古学研究室と出雲市が西谷2号墓の合同発掘調査を実施した。島根大学考古学研究室は主に残丘部の埋葬施設の調査と、墳端の配石構造の調査を行った。

掘削作業は全て手掘りによって行い、遺物取り上げ、遺構検出を行った。検出した遺構については、遺構図・土層図を作成し、写真撮影などによる記録を行った。調査後は、必要と思われる箇所を土蓋で補強し、全てのトレンチを発生土により埋め戻しを行った。

西谷2号墓の調査

1. 墳丘の現状

西谷2号墓は西谷と兎谷に挟まれて北北西方向に派生する尾根上、標高41mに立地する四隅突出型墳丘墓である。北西には1号墓、南東には3号墓が尾根沿いに隣接しており、2号墓はその間の尾根に築造してある。

墳丘の北西側は明治初年から戦後しばらく行われた採土によって大部分が削平されているため、東西15m、高さ2mの残丘のみが確認できる。その後、山林となっていたが現在は整備のために伐採が行われて、南東側は3号墓、4号墓が見え、北西側は1号墓がよく見える状況である。

2. 過去の調査

2号墓は1980年に出雲考古学研究会により発見され、墳丘測量が行われ15m程度の小型の四隅突出型墳丘墓と報告された。また、墳丘の断面観察が行われ、2つの土壙を確認したと報告されている。

その後、島根大学考古学研究室により詳細な測量図作成が行われた。出雲市教育委員会も周辺の追加測量を行い2号墓の測量図が完成した。

1998年には出雲市教育委員会が規模確認のための発掘調査を行っている。調査の結果、北端を確認し、南北36m×東西24m、高さ3.5m、突出部を含めると約50mの大型の墳丘墓となった。そして、全体の3/4が破壊された状況であることがわかった。併せて、古墳の特殊壺・器台も出土していた。

3. トレンチ配置と調査区の分担

(図12)

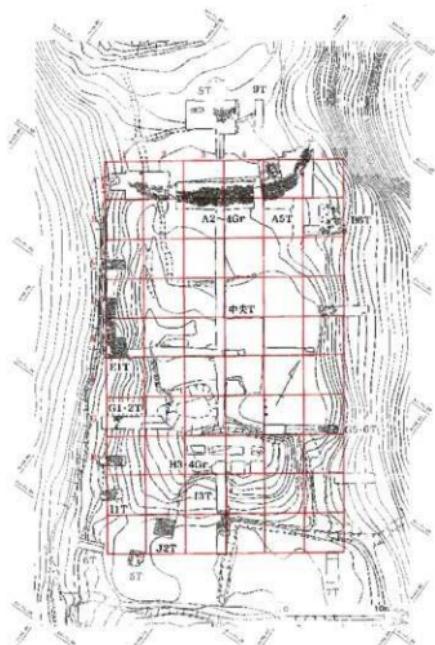


図12 2号墓トレンチ配置図 (1:500)

2号墓の調査は、2002年と2004年に行った。2002年は突出部確認と、東端確認を目的に地形に合わせてトレンチを設定した。トレンチは幅1mを基本とし、必要と判断した場合拡張した。2004年は、2号墓の復元整備を行うため、詳細なデータを得ることを目的とした。調査区は4mグリッドを設定しトレンチ調査を行った。また、併せて残丘の崖面精査を行った。トレンチ名についてないものは、1998年に調査したものである。また、1998年調査のトレンチを拡張したものもある。

そして、2004年8月23日～9月13日の約3週間は島根大学考古学研究室と合同発掘調査を行った。主に、島根大学考古学研究室は残丘部における埋葬施設の確認調査と北側墳壙部(△2～4グリッド)の配石構造の調査、及びG・Eトレンチの墳丘調査を行い、それ以外は出雲市教育委員会が行っている。

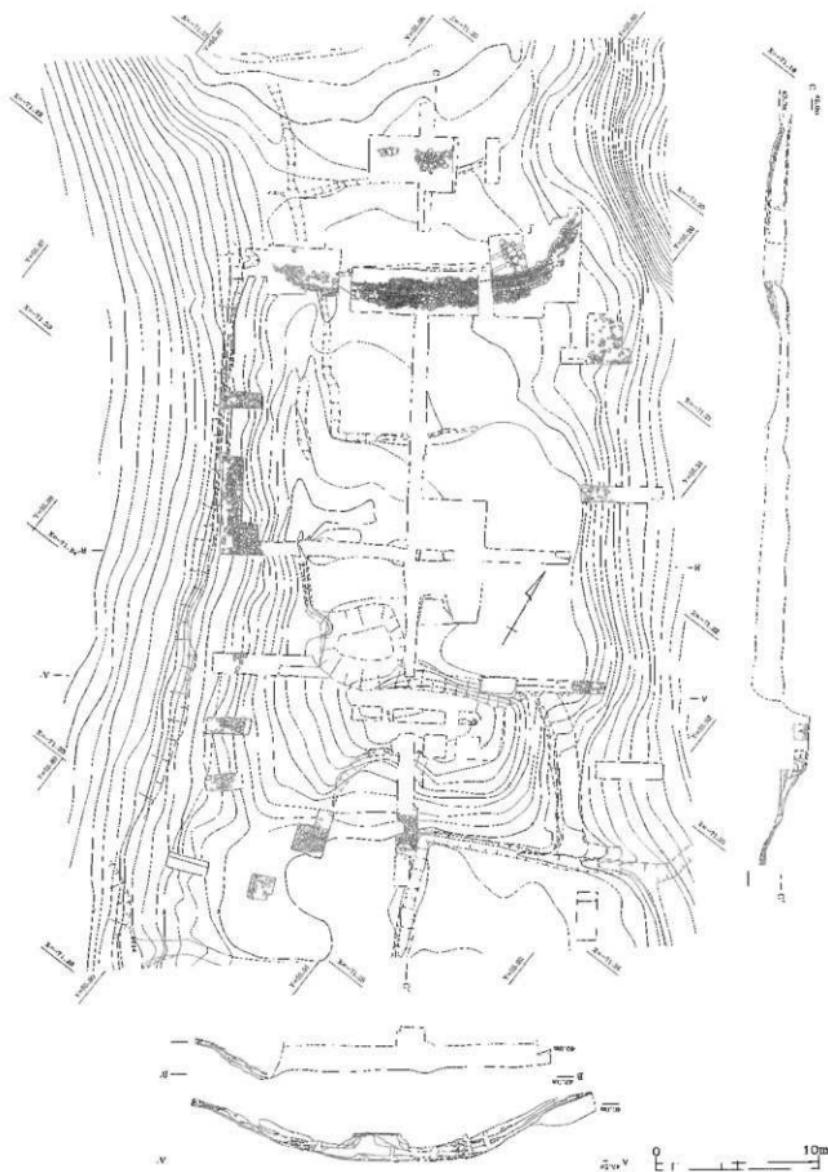


図13 2号墓調査後測量図 (1:300)

4. 第1主体の調査

(1) 墳頂部における発掘区の設定 (図14、16)

西谷2号墓の墳丘は大部分が土取りのために削られており、南側の約1/4のみが残存している。今回の調査では、残丘部における埋葬施設の有無を確認した。

調査にあたっては、H3とH4の各グリッドを2×2mで4等分し、8つの区画にわけて発掘した。発掘区は、一部拡張したり土手をはずしたりしたため、最終的には図14のようになっている。

調査の結果、H3グリッドの北部からH4グリッドの北西部にかけて、大型土壙の南東辺を示す平面プランが検出された。また、H4グリッドの北東部では、表土から0.5m程度掘り下げたところで、盛土内に搅乱もしくは土坑と考えられる暗褐色土を確認した(図16)。しかし、今回は内部まで調査を進めていないため、時期・性格については不明である。その他の発掘区では、遺構・遺物とともに検出されなかった。

(2) 平面プランの確認 (図14、図15-(i))

H3グリッド北部からH4グリッド北西部にかけて検出された大型の土壙を、第1主体と呼ぶこととする。土壙内部の土(平面図の⑤層)と土壙外部の土(⑥層)を比べると、土壙外部の土の方が白・黄・赤色のくさり疊片が多く、色調もやや赤みを帯びている。

第1主体の平面プランは、墳丘表土から東で0.78m、西で0.85mの深さで検出された。これは、後述する崖断面における土壙の掘り込み面とほぼ同じレベルであることから、この平面プランが崖断面で確認された土壙の南東辺を示していることは確実である。図15からわかるように、平面プランのラインを延長していくと、崖断面における土壙の東西の立ち上がりに一致する。

第1主体の平面規模は南北2m以上、東西約4mで、長軸が南北方向を向いているか東西方向を向いているかは不明である。形態は隅丸(長)方形であると考えられる。なお、土壙内部の調査は実施していない。

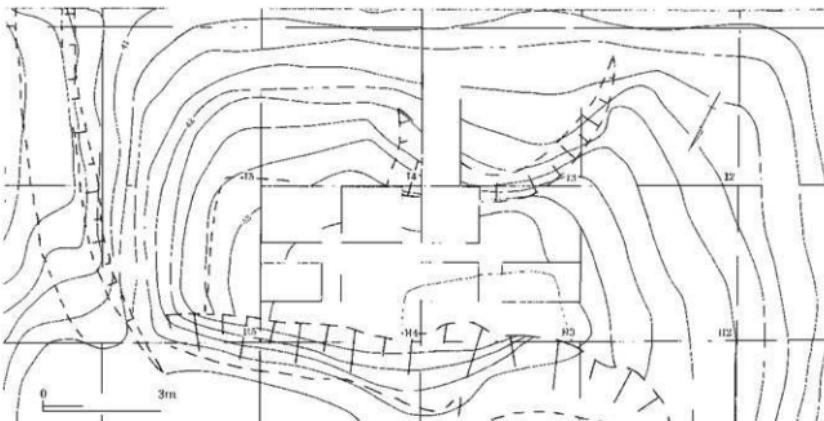


図14 2号墓墳頂部トレーンチ配置概念図 (1:125)

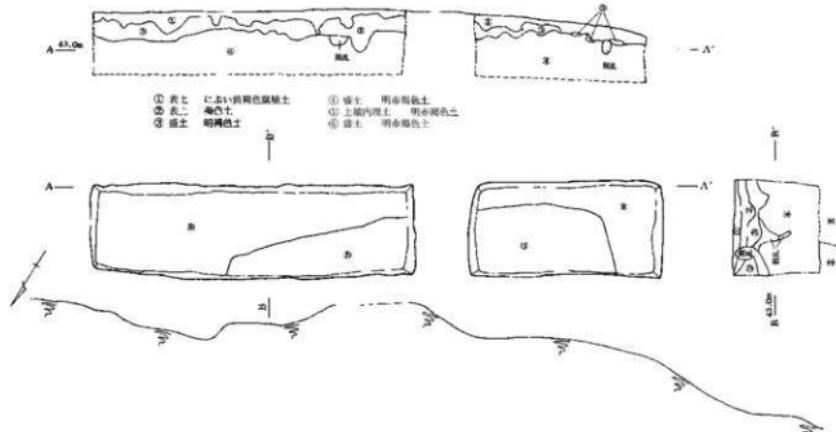
土器の細片が、土壌上部の表土および盛土最上部から十数点検出されている。上塙上に置かれていた土器が残存していた可能性がある。

(3) 崖断面の調査 (図15-(ii))

残丘部に埋葬施設が遺存していないかどうかを調べるために、残丘北側の崖断面の清掃を行なった。清掃は、遺跡の保護のため腐植土を取り除くにとどめて、必要以上に削り込むことはしなかった。その結果、図15-(ii)のような大規模な上塙の断面が検出された。前記したように、これは墳頂部でプランが確認された第1主体の断面である。

第1主体は、地山である山廻砾層の上に積まれた盛土から掘り込まれている。土壌は二段掘りで、その崖断面における寸法は、外塙上縁で東西4.34m、掘り込み面からの深さは東で0.66m、西で0.56mである。

(i) 平面図



(ii) 崖断面図

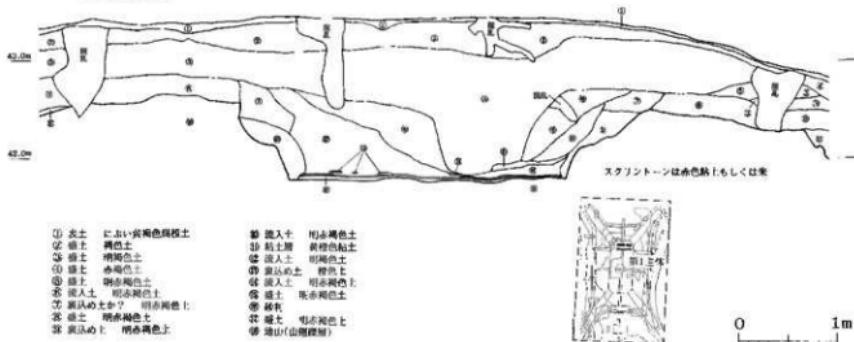


図15 2号墓第1主体 (1:50)

m、内壇上縁で東西3.04m、底面の東西は2.80m、外壇底からの深さは東で0.36m、西で0.32mである。ただし、これらの数値はあくまで崖断面における計測値であり、上壇の長軸・短軸の規模を示しているわけではない。外壇の東壁は垂直に近く掘り込まれているが、西壁はなだらかに傾斜している。

上壇の底には、東端と西端を除いた部分には細かな砂利がわずかに敷かれ、その上に赤色粘土もしくは朱の薄い層がある。一部削られているためにこれらを確認することができない部分もあるが、その両側では確認することができる。本来は両端を除く全面に砂利と赤色粘土もしくは朱が敷かれていたと判断できる。東端と西端では砂利と赤色粘土もしくは朱が見られず、地山の上に直接埋土(⑨・⑩層)がのっている。これらの土層は傾斜が垂直に近いことから、木棺もしくは木櫛を支える裏込めの上だと判断される。したがって、この裏込め上に挿まれた範囲が木棺もしくは木櫛であり、その範囲に砂利および赤色粘土もしくは朱が広がっているわけである。木棺もしくは木櫛の規模は、崖断面で東西約2.65mである。

土壤底面に敷かれた砂利と赤色粘土もしくは朱の上面には粘土層(⑪層)が断続的に存在している。これは蓋板の上に置かれていた粘土が、木棺もしくは木櫛が腐朽し崩れた時に一緒に落ち込んだものと考えられる。よって、その下の⑫層は木棺もしくは木櫛の陥没の初期において流れ込んだ土と考えられる。

②・③層は、上壇を埋めた後に積まれ、墳丘の形を整えた盛土である。図15-(ii)に見られるように、③層は土壇の中央やや西寄りで土壇の底近くまで大きく落ち込んでおり、その部分の土は橙色をしていたが、明確に分層することはできなかった。

②層の上部には上器細片がわずかに露出していた。しかし、検出した箇所は木の根の付近であり、本来の位置を示しているかどうかはわからない。

なお、出雲考古学研究会による調査では残丘の北西側削半部断面に小さな上壇を2基確認したと報告されている。しかし、今回の調査では該当するようなものは認められなかった。

(4) 小結

2号墓は大部分が上取りのために削られており、今回調査することができた残丘は墳丘南端の一部にすぎない。したがって、第1主体は2号墓における中心的な埋葬施設ではなく、周辺埋葬の1つであると考えられる。

第1主体は大部分が破壊されているため、上壇の長軸が南北に向いているのか、東西に向いているのかはわからない。しかし、土壤の規模は東西約4mであり、これが短軸の規模であるとすれば、西谷3号墓の中心的な埋葬施設である第1主体・第4主体に匹敵する大規模なものであったことになる。また、長軸と考えてもかなり大型のものであると考えられる。したがって、西谷2号墓の中央にあった中心的な埋葬施設はこれよりもさらに大規模なものであったと推測されよう。

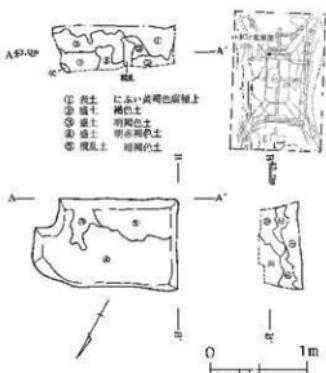


図16 2号墓H4グリッド北東部 (1:50)

次に第1主体の構造について若干の検討をしたい。

岸断面において検出された土壙には、木棺もしくは木槨の裏込め土と考えられる土層が見られた。裏込め土は上下2層に分層できるが、その上にのる盛土（③層）が土壙の中央付近で落ち込んで土壙の底近くまで届いており、蓋板の上に置かれていたと考えられる粘土（⑪層）の直上に達している。このような土層の堆積状況から考えると、木棺もしくは木槨の高さは90cm近くあった可能性がある。

土壙底に見られた細かな砂利は棺もしくは槨の下に敷かれたものと考えられるが、これは裏込め土の下にはほとんど及んでいなかった。土壙の周縁部には礫が敷かれていたのかもしれない。

木棺もしくは木槨の平面規模は岸断面で東西2.65mを測る。隣接する西谷3号墓の中心的埋葬施設の一つである第1主体の木槨が南北2.60m、東西1.20m、木棺が南北2.20m、東西0.96mであることを考えると、2号墓の第1主体は木棺としては規模が大きくなるが、以下のように、木棺と木槨の両方の可能性を考えておきたい。

i. 大型木棺の場合

3号墓第1主体では、朱は木棺内のみに敷かれ、その外側の木槨内には広がっていない。しかし、2号墓第1主体では、赤色粘土もしくは朱が裏込め土に囲まれた範囲に同じように広がっている。赤色粘土もしくは朱が棺内に敷かれるものだったとすれば、第1主体は大型木棺の可能性が高いことになる。

ii. 柏槧二重構造の場合

崖断面では木棺の明瞭な痕跡を認めることはできなかったが、木槨内全体に赤色粘土もしくは朱が敷かれていたとすれば、柏槧二重構造であった可能性もあることになる。この場合注意されるのは、赤色粘土もしくは朱は、③層が落ち込んでいる部分の下およびその周辺が、その両側の部分よりも赤味が強かったことである。したがって、木棺の内部には朱が、その外の木槧内には赤色粘土が敷かれていたという可能性も考えられよう。

これらのことから、大型木棺であったとも木槧をもつ二重構造をしていたとも考えられ、現状ではどちらであると決めることはできない。

（客野祐治・鈴木小穂・中村佳珠）

5. 各トレンチの調査

A 2～4グリッド（図17）

北側墳裾は、出雲市教育委員会によるこれまでの調査から配石構造の遺存状態が良いと予想されたので、この部分の配石構造を精査すること目的として、A 2～4グリッドの南側からB 2～4グリッドの北側にかけて、図17のように東西8m、南北3mのトレンチを設定し調査を行った。

・土層堆積状況

上層観察のためトレンチ内に1m幅の土手を2mおきに残した。この土手は断面実測の後に取り払った。土層を観察すると、表土の下には厚さ50～70cmの擾乱土が堆積していた。これは陶土を採取した際の堆土と考えられる。これをさらに掘り下げるとき、流土が40～50cmにわたって確認できた。流土下層である⑨層には転石が多く含まれている。その下から貼石と2段の敷石・立石を持つ配石構造が良好な遺存状態で確認された。

・配石構造

まず墳丘斜面では、標高40.5m付近から下に貼石が確認された。その上の墳丘は削平されており、前述した流土中にはかなり多くの転石が含まれていたことから、本来の貼石はかなり上方まで施されていたと考えられる。貼石は西端から約2mの間では遺存状態が悪く、一部しか認められなかつた。

貼石の大きさは場所によって明確な差がある。トレンチの東端から約1.2mの間と西端から約1.8mの間には15~20cm大の石が使われている。東端から約1.2m~3.6mの間には20~30cm大のやや大きめの石が使われ、中には40cmを超える大きなものも見られる。そして、東端から約3.6~6.2mの間では10cm大の特に小さな石が密につめられた状態で用いられている。また、貼石の裾部付近では上方の貼石に比べて大きな石が使われる傾向がある。用いられた石はほとんどが丸みを帯びた河原石であるが、東側の一部には板石もみられる。

配石の断面図から墳丘斜面は概ね30度の傾斜をもっていることがわかる。貼石は下から上へ向かってなされていると考えられる。墳丘斜面には地山の上に若干の盛土がなされているが、貼石の大きなものは広い面を貼るように、小さなものは狭い面を差し込んで、斜面に向けて盛土にしっかりと据えられており、小さな石を用いた部分では貼っているというよりは積んでいるような印象を与える。斜面貼石下端の標高は西端で39.8m、東端で39.7mであり、西から東に向かってやや傾斜している。

次に敷石と立石について述べる。上段の敷石は10~15cm大の石をおおよそ2列に並べており、敷石帶の幅は約20~30cmである。この外方に上段の立石がめぐらされており、20cm大の石が用いられている。この立石の外方に上段より5~10cmほど低いレベルで下段の敷石と立石がめぐらされている。下段の敷石は10~20cm大の石を用いており、上段のそれよりもやや幅が狭くなっている。下段の立石は10~40cm大の石が使われている。上段、下段の立石とも貼石や敷石に比べると扁平な石を立て並べて用いている。短軸に比べて長軸が特に長い石は、長軸を倒して用いているようである。長軸と短軸にあまり差がないものは、特にどちらかを倒して用いるというような傾向は認められない。敷石と立石の石の大きさは貼石で見られたような顕著な違いはないが、やはり近くの貼石の大きさに合わせた多少の違いがあるように観察される。下段立石下端の標高は西側で39.7m、東側では39.6mであり、やはり西から東に向かってやや傾斜している。

敷石と立石の遺存状態を見ると、上段の敷石、立石はほぼ完存している。しかし、下段の敷石は東端から0.7~1.2mの間、東端から2.5~4.0mまでの間、東端から5.5m~西端までの間で失われている。また、下段の立石は東端から0.6m~1.1mの間、東端から2.6~3.9mまでの間、東端から5.4mから西端で失われていた。

・小結

この調査では墳丘裾部を廻繞した2段の配石構造が良好な状態で確認できた。また、一定の範囲で石の大きさに明確な違いがあることも観察できた。斜面の貼石の下端と上段立石の下端は西側から東側にかけて同じような傾斜を示しており、ともに東西の標高差はわずか10cmほどであるなど、造墓工事の見事な企画性がうかがわれる。

(中村倫子・百田麻)

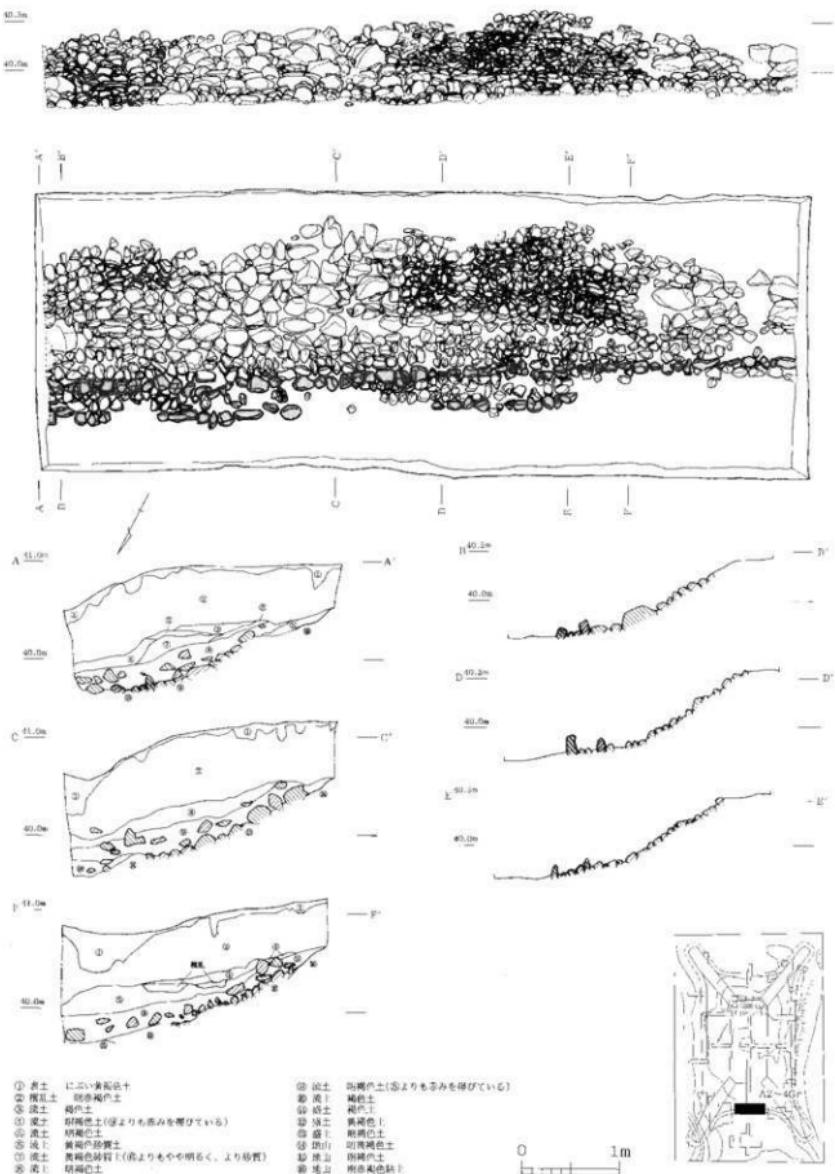


図17 2号墓 A2～4グリッド (1:50)

E 1 トレンチ (図18)

貼石がどの程度残存しているかを確認するために、西側の墳丘斜面にFラインに沿って東西5m、南北1mのトレンチを設け、1998年に出雲市教育委員会が調査したW-2区に連続させた。

陶土採取時の排土と考えられる壊乱土（①層）、表土（②層）の下には、本来の墳丘面からの流土（③～⑥層）が20～40cm程度堆積していた。地山上面が凹凸していることから、墳丘斜面の上方は削られていると考えられる。墳丘斜面の角度は25～35度程度である。

配石構造は比較的良好な状態で確認された。斜面の貼石は標高約40.7mより下で幅約1.4mにわたって確認されたが、本来の貼石はかなり上方まで施されていたと考えられる。貼石は盛土の上に密に貼りめぐらされており、その多くは石の下部が墳丘盛土に入り込むような形で貼られていた。斜面の貼石に使用された石は20～30cm大の大きめの河原石が多く、斜面の下端近くで比較的大形の扁平な石を多用する傾向がみられる。斜面の貼石下端の標高は39.9mである。

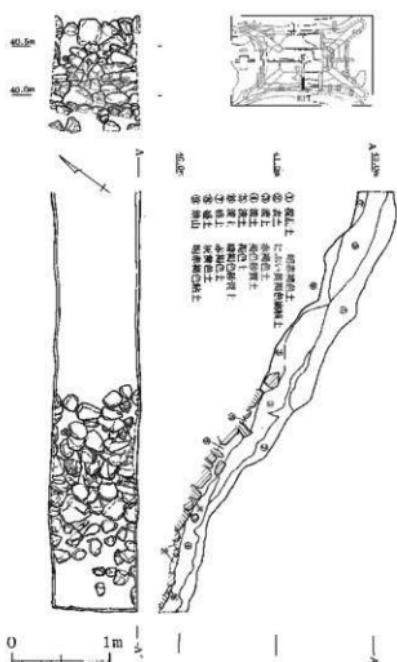


図18 2号墓E1トレンチ (1:50)

斜面の貼石の外方には、2列の敷石および立石が確認された。貼石下端外方に幅40～60cmの敷石帯がめぐり、25cm大以下の比較的小形の石が敷きつめられている。この敷石帯の外周には20～30cm大の扁平な石を立て並べた立石がめぐらされる。この立石の外方にはもう1段ずつ同様の敷石および立石が、内側のそれより10～20cm低いレベルでめぐっているが、遺存状態はあまり良くなかった。
(片山尚子)

G 1・2 トレンチ (図19)

東西方向の墳丘断面図を作成すること、配石構造の遺存状態を確認することを目的とし、残丘部崖面の継ぎとなる西側の墳丘斜面から墳丘裾部にかけて、東西7m、南北1.5mのトレンチを設け調査した。トレンチはG1・G2グリッドの中央南寄りに位置している。

ここでは、墳丘斜面の低い方には表土の下に墳丘斜面からの流土（②・③層）が20～50cm程度堆積している。流土中には転石が多く含まれている。墳丘の盛土については、地山の上に⑩～⑫層を盛った後、斜面の高い方に⑨層を厚く盛り、さらにその上に④～⑧層を積んで墳丘の形を整えている。

墳丘斜面の下方では、流土の下に斜面の貼石

の一部が確認されたが、遺存状態は良くなかった。貼石は盛土（⑫層）の上に貼られており、残存していた貼石には15~35cm大の河原石が使用されていた。斜面の貼石下端の標高は推定で40.0m程度と考えられる。敷石・立石は残存していなかった。

流土下層（③層）から土器片がいくつか検出された。それらの中には、綾杉文をもつ特異な土器の破片も含まれている（図48-9~11）。

（片山尚子）

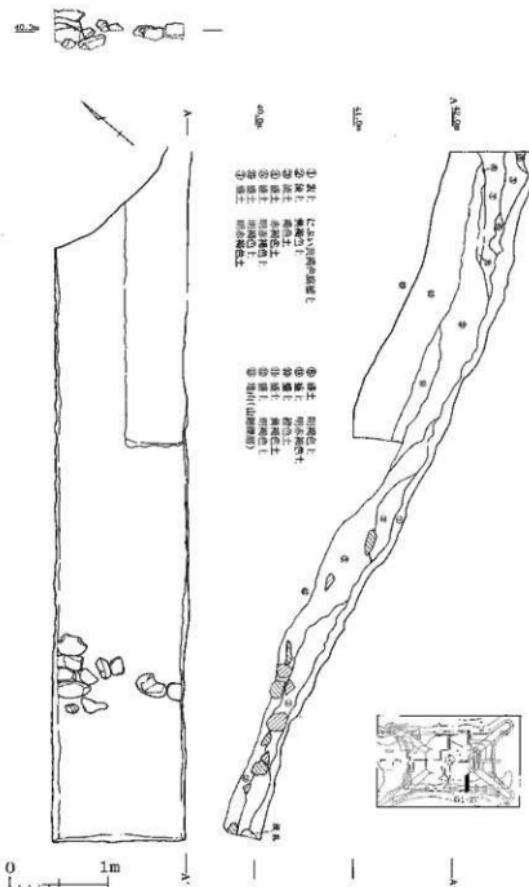


図19 2号墓G1・2トレンチ (1:50)

I 1 トレンチ (図20)

I 1 トレンチは西端から南西突出部に向かう部分の墳形を確認する目的で調査した。調査の結果、貼石・敷石を確認した。立石部分は崩壊している。かなり動いているため、また、斜面が急であるために、明確な貼石と敷石の区別は難しい。貼石には主に30cm程度の石が、敷石部分には10~20cmの小さい石が立つ。

貼石・敷石はトレンチに対し斜めに日地が通っていて、突出部に曲がり始めた部分と考えられる。遺物は出土していない。敷石の下には約10cmの盛土を確認した。

5 トレンチ・6 トレンチ (図21)

5・6 トレンチは南西突出部の幅及び形を確認するために調査した。調査の結果、探土の攪乱を受けていて突出部に関係する遺構は確認できなかった。5 トレンチで石を確認したが、元位置ではないと判断した。

J 2 トレンチ (図22)

J 2 トレンチは、南端から南西突出部へ曲がる部分の形を確認するために調査した。調査の結果、貼石と2段の敷石・立石を確認し、非常に残りの良好な場所であった。また、墳端も明確で、南西突出部へ曲がる部分であることがわかった。貼石・敷石は地山に置かれている。

出土遺物は搅乱土内の萬祥山焼と一緒に鉄製品が2点出土している。問題はこの鉄製品の出自であり、可能性として2案あり、1つは2号墓の埋葬施設に伴うもので、探土の際に出土し萬祥山焼と一緒に捨てられた説と、別の墳墓で出土しこの場所に捨てられた説が考えられる。単純に2号墓に伴

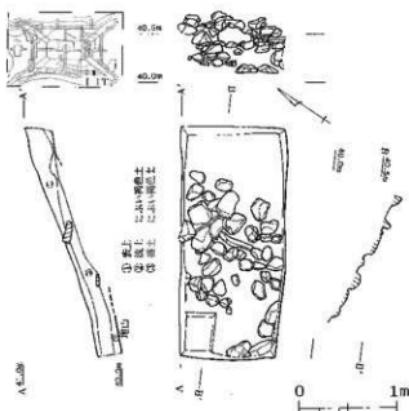


図20 2号墓 I 1 トレンチ (1:50)

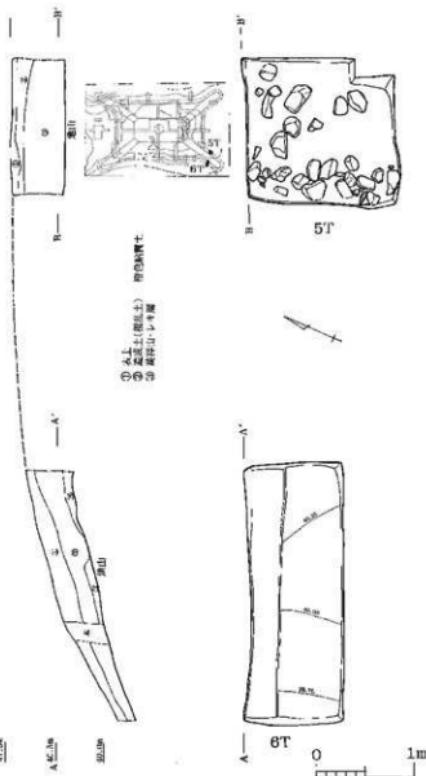


図21 2号墓 5・6 トレンチ (1:50)

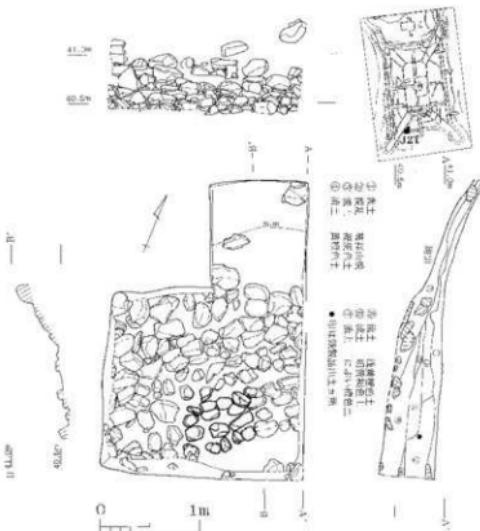


図22 2号墓J2トレンチ (1:50)

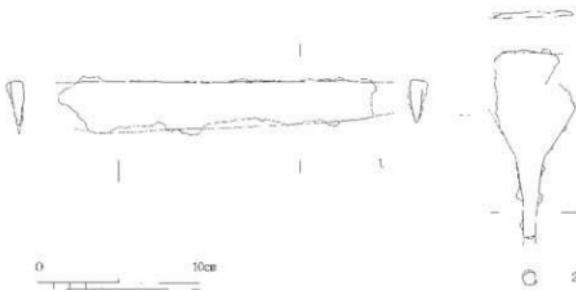


図23 2号墓J2トレンチ出土鉄製品 (1:3)

う遺物と断定することは難しい。

図23の1は鐵刀の破片であり、切先・柄は残っていない。刀部もかなり壊れている。残存長19.3cm、最大幅3.2cm、最小幅2.2cm、厚さ0.8cmを測る。鳥根県内の弥生時代遺跡から刀が出土することは珍しいが、鳥取県では出土している。

図23の2は、鐵錠に似た鉄製品であるが、国内には類例がない不明遺物であり、現段階では鐵錠状鉄製品と呼んで、今後の検討課題としたい。円形に近い茎をもち、ヘラ状に上に開くような形をしているが、先の両端は欠けていて正確な形態は不明である。残存長11.5cm、残存幅4.8cm、茎径0.8cm、厚さ0.4cmを測る。別の鉄製品も付着しているようである。

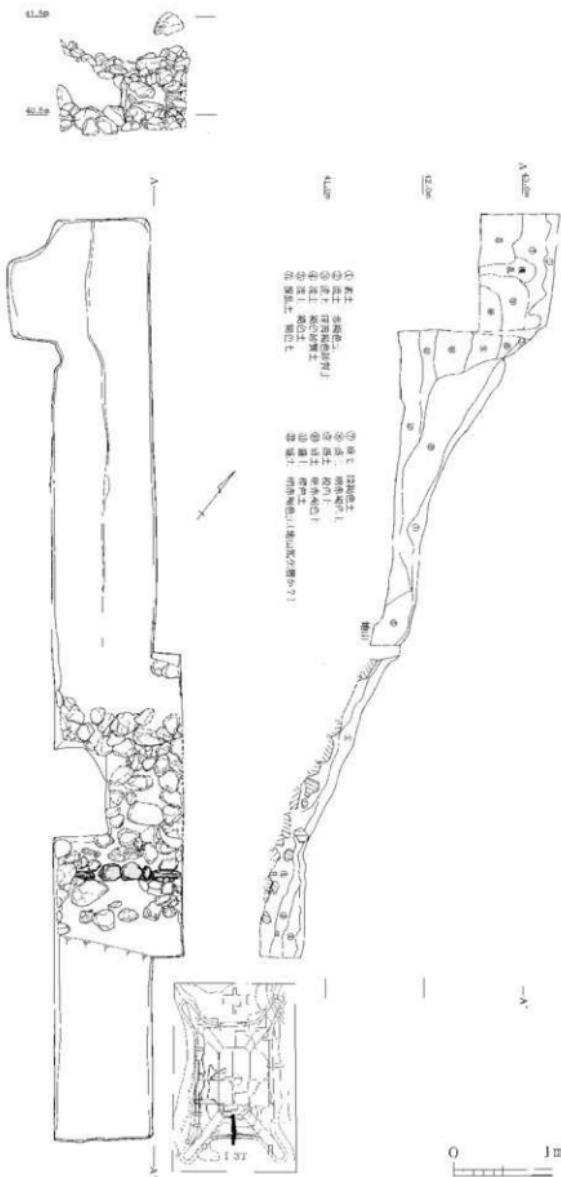


図24 2号墓I-3トレンチ (1:50)

I-3トレンチ (図24)

I-3トレンチは1998年のSトレンチを墳頂側に拡張したトレンチである。このトレンチは2号墓の中心を通るトレンチで、貼石が残存していないため墳丘の断ち割りを目的とし調査した。1998年のSトレンチでは、貼石、2段の敷石・立石を確認し、墳端は明確である。

今回の調査の結果、墳丘斜面は擾乱を受けているが、墳頂部では約1.5mの盛土で墳丘を築造していることがわかった。

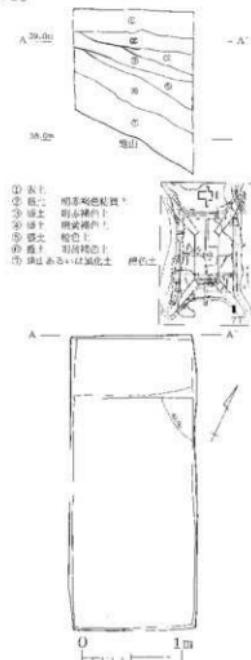


図25 2号墓I-7トレンチ (1:50)

7トレンチ（図25）

7トレンチは南東突出部の南側を調査した。既に南東突出部は削平されていて、現況地形からは突出部とわかる情報を得ることはできない。しかし、突出部の築造方法を解明するためトレンチ調査を行った。調査の結果、墳丘面は現況でわかるように削平されていた。また、築造前の地形は、より狭い尾根であったことがわかった。狭い尾根に突出部を作るため、7トレンチ部分では40cm～1mの盛土をし築造している。南東突出部は復元すると、7トレンチから東へ約6mは突出部が伸びると予想すると、かなりの盛土が行われたと考えられる。

G5・6トレンチ（図26）

G5・6トレンチは、1998年の調査では不明であった東端を確認するために調査を行った。また、残丘の崖面とはほぼ同じ位置であるため、東西のラインの断面土層を作成した。

調査の結果、墳丘の搅乱土が斜面に押し出してあることがわかった。また、貼石・敷石を確認した。貼石の1段目は明確に残っていたが、2段目は崩壊していた。他の墳端の例から、2段の敷石・立石の幅が80cm～1mであるからトレンチ内に墳端があると考えられる。

墳丘斜面は40cm～60cmの盛土があり、その上面に貼石が行われている。

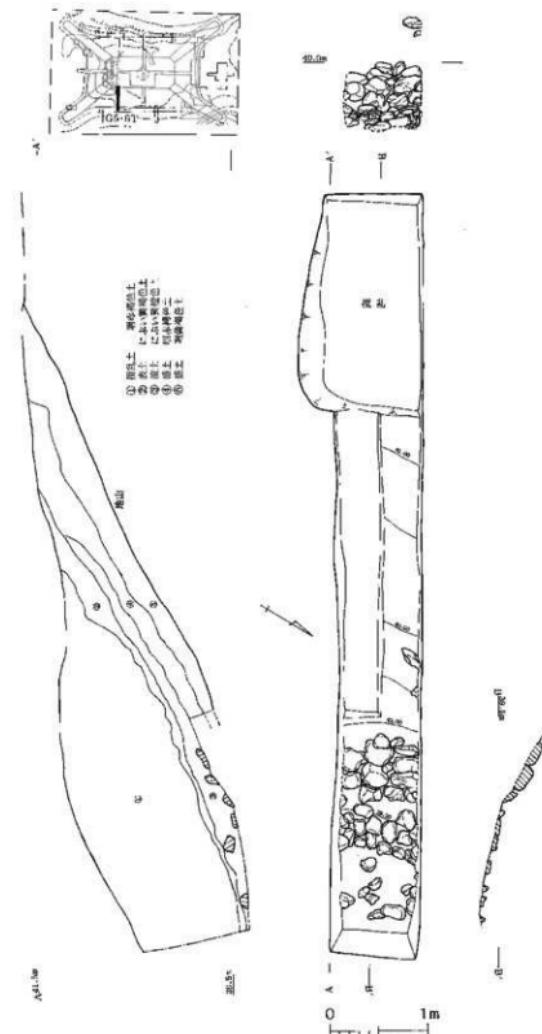


図26 2号墓G5・6トレンチ (1:50)

B 6 トレンチ (図27)

B 6 トレンチは東端の北東突出部に近い部分を確認する目的で調査を行った。調査の結果、かなり配石が崩壊している状況であったが、一部に配石が残っている部分があった。それは、貼石のように斜面に敷かれた石とその下に立石がある状況であり、この部分を以下の通り判断した。通常敷石は、垂平に近い状態に並べるものであるが、2号墓の場合、尾根ぎりぎりに造っている為、垂平部分を造らず斜面なりに敷石・立石を配石したと考えられ、残っている部分は1段目の敷石・立石であろう。このことから、墳端は標高39.25mのコンタライン付近と推測した。

配石の残りが悪いため、北西側に拡張したが状況は変わっていない。

墳丘斜面には10cm程度の盛土があり、その上面に敷石・立石がある。このトレンチからは遺物は出土していない。

A 5 トレンチ (図28)

A 5 トレンチは北端から北東突出部に曲がる部分を確認する目的で調査を行った。現況は、墳丘擾乱土が押し出されている状況で、突出部形態はわからない。

調査の結果、突出部上面は削平されているが、一部に貼石と2段の敷石・立石が突出部にかけて残っていることがわかった。貼石は、根石に30cm程度の大きな石を使い、それより上は10cm程度の石を貼るのではなく積んでいるようである。これは石が河原石で扁平な石を使っていないためと考えられる。

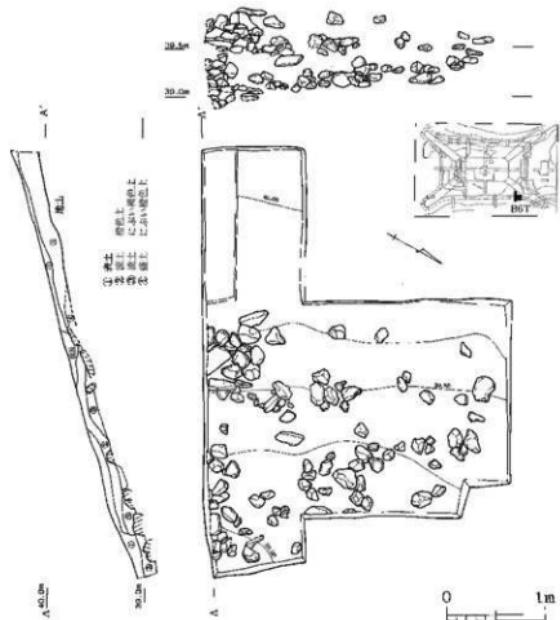


図27 2号墓B 6 トレンチ (1:50)

2段の敷石・立石は良好に残っているが、突出部分では崩れが大きく元の位置からやや西側に動いていると考えられる。

また、2号墓築造とほぼ同じ時期に造られた集石遺構①を検出した(図29)。集石遺構①は北突出部に曲がり始める墳端の立石から、北東側に向って50cm程度の扁平な石が6個敷くように並んでいる。それを囲むように10cm~30cmの石が置いてある。長軸2.3m、短軸1.2mを測る。

この遺構に伴う遺物は出土していないため正確な時期は不明であるが、遺構の検出状況から以下のことが考えられ

る。石が敷いてある面は、2号墓と同じ面であり、また、2号墓の2段目の立石に接するように造られていること、2号墓の配石と同じ流土で埋まっていることから、集石造構①は2号墓に伴う造構と考えられ、築造時期も近い時期であろう。この造構の性格を明らかにするため、2号墓からみて4番目の石を取り上げて造構の下を掘削したが、掘り込みはみつからなかった。よって、当造構の性格は不明で、墓以外の性格を持つと考えられる。

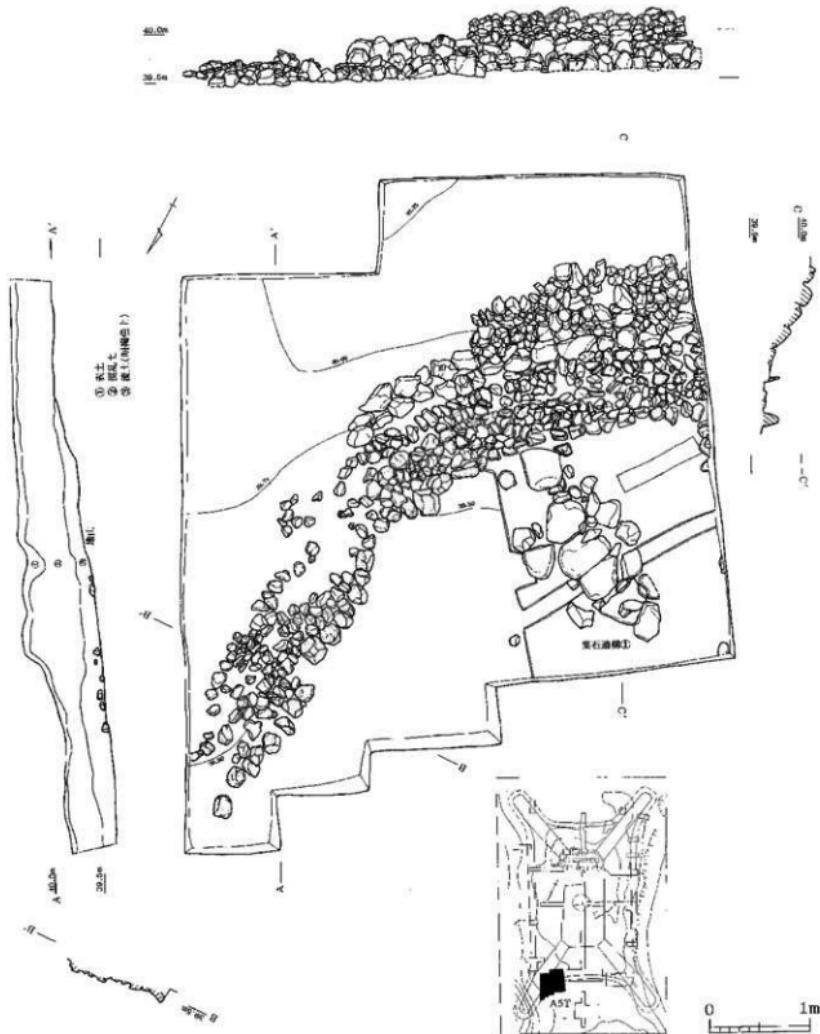


図28 2号墓A5トレンチ (1:50)

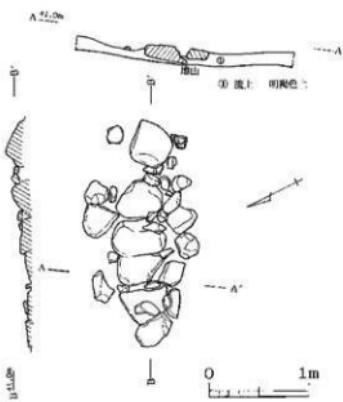


図29 2号墓集石室遺構① (1:50)

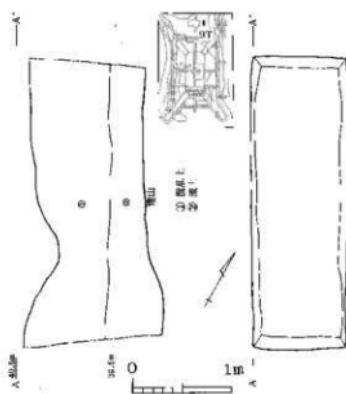


図30 2号墓9トレンチ (1:50)

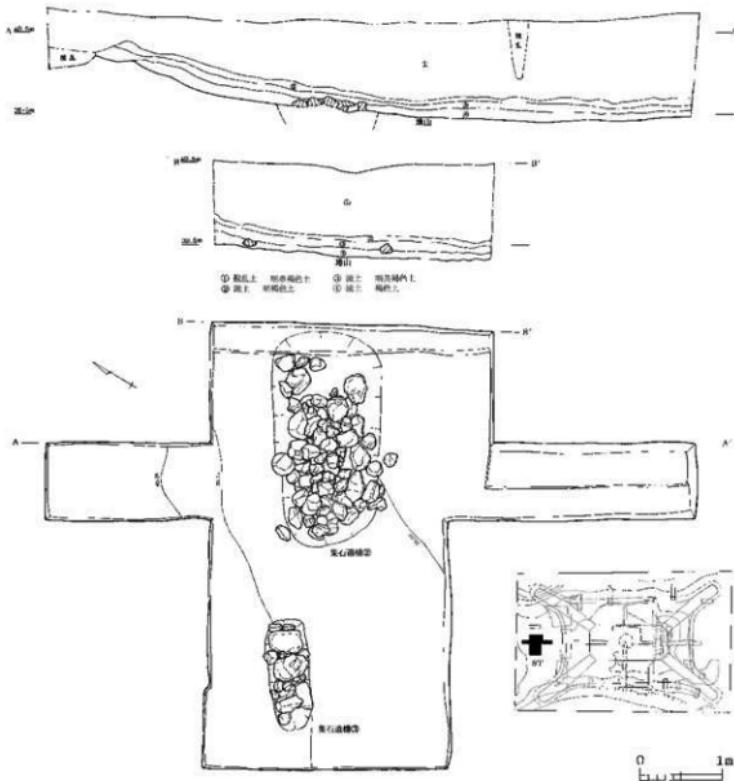


図31 2号墓8トレンチ (1:60)

9トレンチ (図30)

9トレンチは、西谷2号墓の北側平坦面の東よりに位置する。8トレンチで集石造構②を確認したため、その造構の範囲を確認する目的で調査した。調査の結果、転石は検出したが集石造構②は9トレンチまで続かないことがわかった。

8トレンチ (図31)

8トレンチは、西谷2号墓北西の平坦面の状況を確認する目的で、2号墓の南北の中心ラインを延長したトレンチである。

調査の結果、墳丘を崩した土が約80cm堆積して平坦面ができていることがわかった。また、2号墓築造面と同じ面で集石造構②を検出した。この造構の範囲を確認するためトレンチを拡張したところ、西側で集石造構③を確認した。

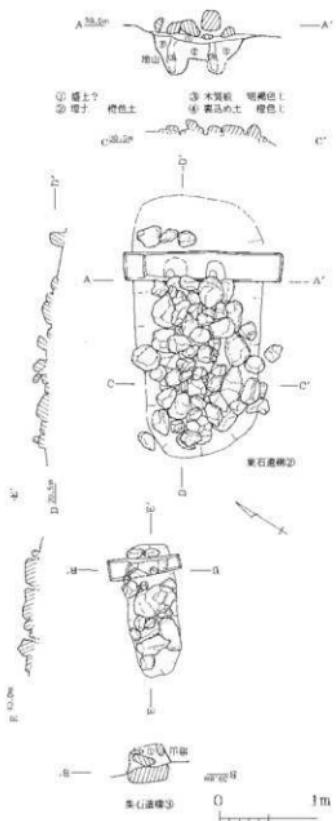


図32 2号墓集石造構②・③ (1:50)

集石造構②・③は、地山に築造されている (図32)。

築造当時は2号墓の墳端から北側には約7mの平坦面があり、それから、北側の地山のレベルが徐々に上昇している。現況で確認できる西谷1号墓のある面との段差は、採土の際にできたことがわかる。

集石造構②は長軸2.7m、短軸1.3m、深さ0.2mを測る平面形が隅丸長方形の土壙墓と考えられ、20cm-30cmの河原石が土壙の上に集石してある。この造構の土層を確認するため、集石が少ない部分にサブトレンチを設定した。その結果、木棺の側板と考えられる部分が確認でき、また、地山に側板を立てる溝があることもわかった。このように木棺を安置した後、裏込め土を入れ、全体にさらに盛土をし、その後、集石したと考えられる。

集石造構③は長軸1.2m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る平面形が隅丸長方形の土壙墓と考えられ、約40cmの大きな河原石を土壙の上に3個敷き、その周りに10cm程度の石が集石してある。この造構の土層を確認するため、北東側の約40cmの大きな石をはずして掘削をした。その結果、掘込みがあることがわかり、その掘込みの中には集石した石が落ち込んでいた。

集石造構②・③は一般的に配石墓と呼ばれているもので、出雲市大社町の原山遺跡や、松江市鹿島町の堀部第Ⅰ遺跡に類例がある。また、集石造構②・③の築造時期は出土遺物がないため不明確であるが、西谷2

弓墓と同じ流水で埋まっているため、近い時期に造られたと考えられ、西谷2号墓の周辺埋葬ととらえることができよう。

四隅突出型埴丘墓には、西谷2号墓の集石遺構①のような性格が不明な遺構が伴うことがある。類例として、西谷4号墓の集石遺構、順庵原1号墓のストーンサークルや中野1号墓の集石遺構などがあげられる。これらの遺構も性格は不明であり、今後の検討すべき課題である。

中央トレンチ（図33）

1998年の調査で、西谷2号墓の中心ライン（北—南）は一部調査が行われている。その際に、攪乱土から在地土器や吉備の特殊壺、吉備型器台が出土した。これらの上器は西谷2号墓の中心埋葬施設に伴う土器と考えられ、まだ多くが埋まっていると予想した。そのため、今回の調査では、できるだけ多くの遺物を採取したいと考え、1m幅で十字にトレンチを設定し、調査を行った。調査の結果、E4グリッド付近で多くの土器が出土したため、E4グリッド、F4グリッドを拡張して掘削を行った。すると、在地弥生土器、吉備の特殊壺、吉備型器台、吉備の模倣土器、北陸系土器、ガラス釧、ガラ

ス管玉、水銀朱が出土している。これらの遺物は、採上の際に出土し、そのまま近くに捨てられたものと考えられ、すべて攪乱土からの出土であるが、2号墓に伴う遺物であると考えられる。遺物は標高40m付近まで出土するが、その下では遺物は出土しないため、主な調査は40m付近で止めている。一部は攪乱がどこまで行われたかを確定するため、その下も掘削した。そして、標高39.2m付近で地山を検出した。これにより、西谷2号墓の墳頂は標高43.5m付近であるから、約4.3mは墳丘が攪乱をうけていることがわかった。

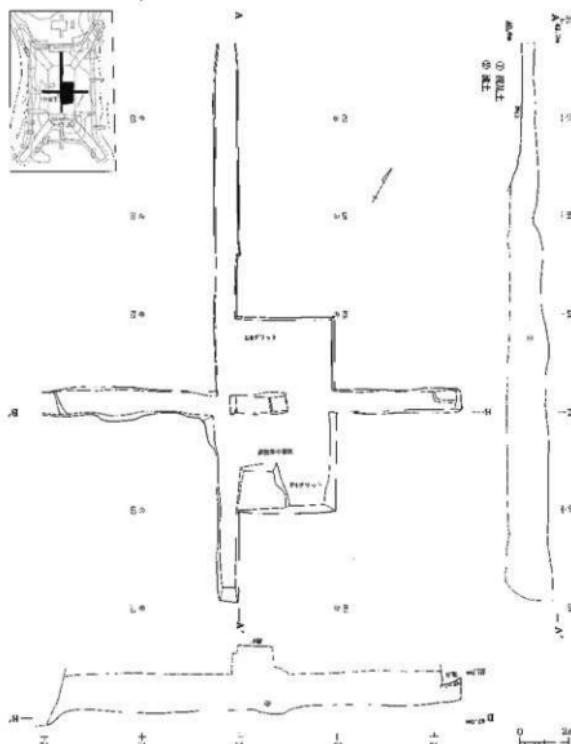


図33 2号墓中央トレンチ (1:200)

5. 出土遺物

中央トレンチとGトレンチ出土遺物を報告するが、土器胎土、朱、ガラス釧・ガラス管玉については第4章の分析編で詳細に報告する。中央トレンチでは、E4グリッド・F4グリッドとG3グリッドの2ヶ所で遺物が出土している。E4・F4グリッド出土遺物は、西谷2号墓の中心埋葬施設（第2主体）に伴う遺物の可能性が高いためまとめて報告する。G3グリッドとG1トレンチ出土遺物は第1主体部に伴う可能性があるものとしてまとめて報告する。

E4・F4グリッド出土遺物

土器は在地土器と吉備型土器などが出土している。在地土器の色調は、主に浅黄橙色をなす。

壺形土器

岡34の1～19は複合口縁をなす壺あるいは壺の口縁部から胴部にかけての破片で、34-19以外には口縁部外面に平行沈線文が施してあり、胴部外面には、平行沈線文と貝殻復縁による羽状文が施してあるタイプである。色調は浅黄橙色をなし、焼成は良好である。34-1は口縁端部を欠いた胴部上半までの破片で、残存部の最大径12cmを測る。外面の口縁部から屈曲部にかけて平行沈線文が施してあり、胴部上半には貝殻復縁による羽状文が施してある。胴部上半の内面にはケズリが施してある。34-2は口縁部片で口径14cmを測る。口縁部外面には19条の平行沈線文が、内面には丁寧なヨコナデが施してある。34-3は、口縁端部を欠いた胴部上半までの破片で、残存部最大径14.8cmを測る。口縁部外面及び胴部上半外面には平行線文が施してあり、胴部内面にはケズリが施してある。34-4は、口縁端部を欠いた胴部上半までの破片で、残存部最大径12cmを測る。口縁部外面には平行沈線文が、胴部外面には4条の平行沈線文の下に貝殻復縁による羽状文が施してあり、胴部内面はケズリが施してある。34-5は口縁部から胴部上半までの破片で、口径17cmを測る。口縁部は磨滅が激しく、平行沈線文は残っていない。胴部上半には3条の平行沈線文の下に、貝殻復縁による羽状文が施してあり、胴部内面はケズリが施してある。34-6は口縁部から胴部上半までの破片で口径17cmを測る。全体に磨滅が激しく、口縁部外面に平行沈線文が少し残っている。34-7は口縁部から胴部上半にかけての破片で口径約14cmを測る。器壁は薄く全体に磨滅が激しい。34-8は口縁端部を欠いた胴部上半までの破片で、残存最大径13.5cmを測る。口縁部外面には平行沈線文が施してある。34-9は口縁端部を欠く胴部上半までの破片で、口縁部外面は磨滅が著しい。34-10～13は口縁部から胴部上半までの破片で破片が小さいため復元図の作成をやめたものである。いずれも口縁部外面に平行沈線文が施してある。34-14～17は胴部片で上には34-1～13までの口縁部がつくと考えられる。34-14は胴部最大径約14.2cmを測る。胴部外面には4条の平行沈線文の下に貝殻復縁による羽状文が施され、それが交互あり、合計で平行沈線文が4段、その間に羽状文が3段現状でわかる。内面はケズリが施してある。34-15～17も35-14と同じ文様構成で、35-16は肩が張る器形をなす。34-18は屈曲部から胴部上半にかけての破片で、上記のものより小型で胴部最大径約10cmを測る。胴部外面には貝殻復縁による羽状文が施されている。平行沈線文は施されず、他のものとは文様構成が異なる。34-19は2次口縁部が約2.6cmと短く、平行沈線も施されていない。1次口縁と2次口縁の接点の突出が34-1～13よりも鋭く、これらのタイプよりやや新しい器形と考えられる。34-20～22は底部片で上記の胴部片の下につくものと考えられる。色調は浅黄橙色をなし、焼成は良好である。34-20は底径5cmを測る。平底

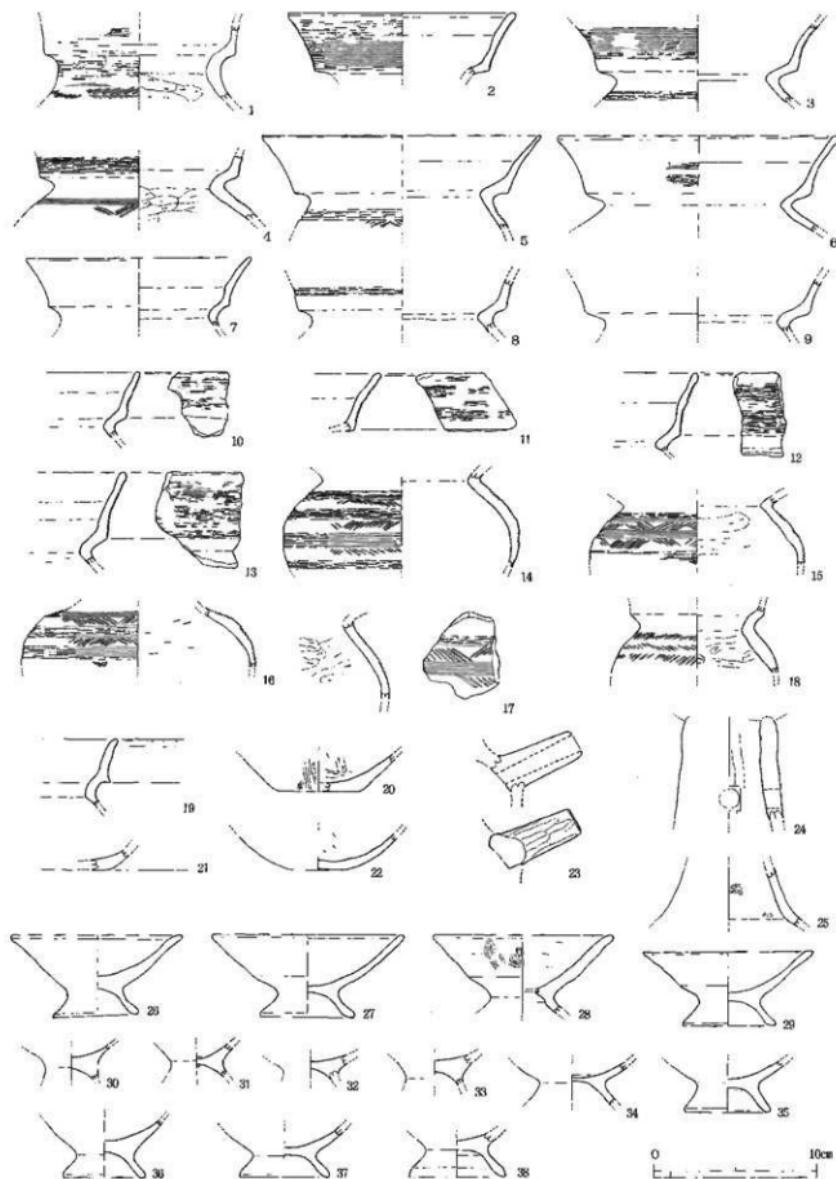


図34 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(1) (1:3)

で、くびれず直線的に開いて立ち上がる。外面にはハケメ後ナデが、内面にはケズリが施してある。34-21は平底であるが、34-20と同じくくびれず立ち上がる。34-22は底径4.5cmを測る丸底気味の底部である。

注口土器

注口土器とわかるものは34-23の1点のみであった。34-23は注口部で、長さ5cm、幅2cm、孔径1cmを測る。外面には丁寧なミガキが施してある。色調は浅黄橙色をなし、焼成は良好である。

高坏

34-24、25は高坏の脚部の破片である。34-24は円盤充填で作られる高坏の筒部で、最大径6.2cmを割り、器壁は1cmと厚い。円形の透かしが1ヶ所あり、内面には絞りの跡が残る。色調は明黄褐色をなし、焼成は良好である。34-25は聞くタイプの筒部で、屈曲し裾に聞く部分である。最大径約9cmを測り、器壁は6mmと薄い。内面にはハケメが施してあり、在地土器の調整手法と異なる。胎土は金雲母を多く含みやや在地の胎土とは異なる印象を受ける。外面色調は明黄褐色をなし、内面には黒斑がみられる。北陸系の高坏の可能性も考えられる。

低脚坏

34-26～38は低脚坏である。口径約11cm前後、器高5cm、脚径5～6cm、脚高1.4cmのもので、坏部はやや湾曲しながらも直線的に広がり、脚部は塊形に聞くタイプで、すべて同じ器形である。色調は明黄褐色をなし、焼成は良好である。34-26は口径10.5cm、器高5cm、脚径5.4cm、脚高1.6cmを測る。口縁部の一部と脚端部を一部欠くが完形に近い。全体に磨滅が激しい。口縁端部には黒斑がみられる。34-27は口径10.4cm、器高4.4cm、脚径5.8cm、脚高1.4cmを測る。脚部を一部欠くが完形に近い。外面の磨滅が著しい。外面には黒斑がみられる。34-28は口径約11cmを測る。全体に磨滅が激しい。34-29は坏部の湾曲が他のものより少し大きい特徴をもつ。口径11.6cm、器高5cm、脚径5.7cm、脚高1.4cmを測る。全体的に磨滅が激しい。34-30～34は坏部と脚部の接合部である。34-35～38は接合部から脚部の破片である。脚径及び器高は西谷3号墓第1主体のものよりやや大きくなっている。

鼓形器台

図35～図36-10は鼓形器台である。大小のタイプがあると考えられるが、破片のため明確にわけることは難しい。全体的に磨滅が激しく調整の把握は難しい。そのため、器受部か脚部かの判断が難しく可能性の高いほうで図を作成している。35-1～15は大きい器台を集めている。35-1～9は器受部である。器形としては、筒部があるものと(35-1～3)と、筒部がほとんどなく屈曲するもの(35-7～9)がある。35-1は口縁部から筒部にかけての破片で、口径19cmを測る。器受部は湾曲して立ち上がり、口縁部付近でより広がる。筒部は内面で2.4cmあり、外面には3条の平行沈線文の下に羽状文、その下に平行沈線文が施してある。筒部内面はケズリが施してある。色調は淡黄色をなし。35-2は口縁端部を欠く筒部までの破片で、35-1と同じ器形をなす。口縁部外面はナデが施され平行沈線文はみられない。筒部は35-1より短いが、文様構成は同じである。35-3は、口縁端部を欠く筒部までの破片で、35-1と同じ器形をなす。磨滅が激しい。35-4～6は器受部の破片で、湾曲して立ち上がり、口縁部付近でより広がる。口縁部外面には平行沈線文が施してある。35-7～9は器受部から脚部との接合部までの破片で、器受部は直線気味に聞く。筒部はほとんどなく、屈曲

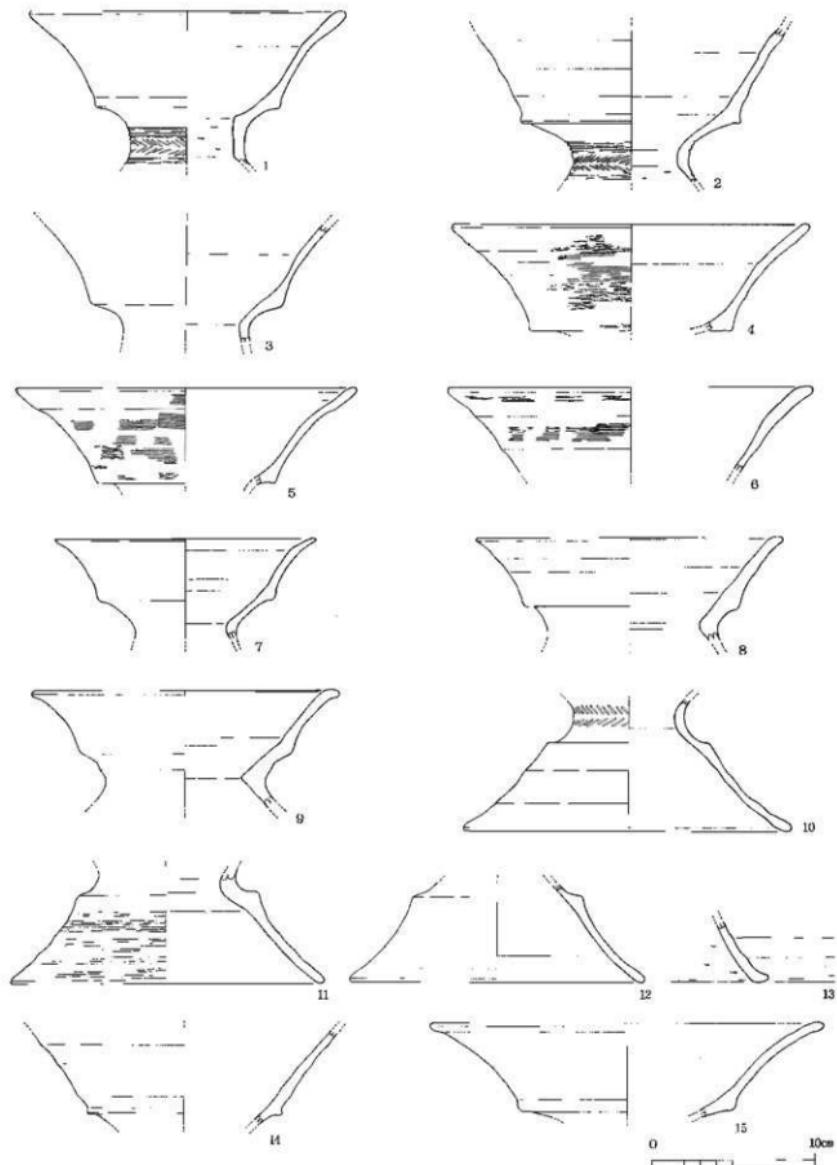


図35 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(2)(1:3)

して脚部に向う器形である。35-8は他のものよりも器壁が厚い。35-9は筒部が「く」字に強く屈曲する。35-10~13は脚部の破片である。35-10は筒部から脚部にかけての破片で脚径19.8cmを測る。筒部外面には羽状文が施してある。35-11は脚径19cmを測る。筒部はほとんど残っていないが、ほとんど筒部のないタイプと考えられる。脚外面には平行沈線文が施してある。35-12は脚部片で筒部までは残っていない。脚径17.8cmを測り、全体的に磨滅が激しい。35-13は脚部片で、脚端部が強く引き出してあるものである。外面には平行沈線文ではなく、内面にはケズリが施してある。35-14は磨滅が激しく、上下の判定が難しいものである。器形は筒部から直線的に開くものである。35-15は器受部の破片で口径約24cmを測るもので、35-1~9よりは口縁部が大きく外反して開き口径が大きいもので、やや新しいタイプのものである。全面に磨滅が激しい。

36-1~10は図35よりはやや小型の鼓形器台である。36-1は器受部と脚部の破片で、接合しないが胎土から同一個体と判断した。大きさは口径約15cm、器高約10cm程度と考えられる。全体に磨滅が激しく、文様、調整は不明である。色調は橙色をなし、胎土には3mm程度の白色粒を多く含む。36-2は器受部の破片で口縁端部を欠いている。筒部はほとんどなく「C」字状に屈曲する。全体的に磨滅が著しい。36-3は筒部の破片で、筒部径7.6cmを測る。筒部は短く、外面には無軸の羽状文が施してある。全体的に磨滅が著しい。36-4~10は筒部から脚部の破片で、脚端部を欠いている。36-

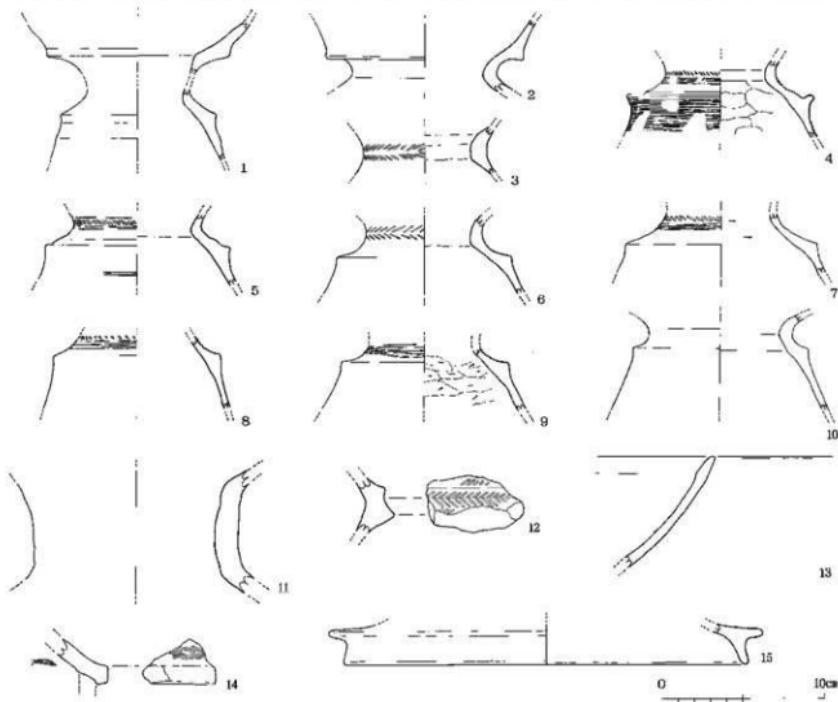


図36 2号墓E 4・F 4グリッド出土遺物(3)(1:3)

4は筒部に刻目（羽状文の下段か）とその下に平行沈線文が、脚部外面にも平行沈線文が施してある。筒部と脚部の境の突出が他のものよりも大きい。色調は黄褐色をなし在地土器の色調とは異なる。36-5も36-4と似た色調・胎土・文様をしていて、同じタイプと考えられる。36-6は短い筒部があり、筒部外面に貝殻復縁による羽状文が施してある。全体的に磨滅が著しい。36-7・8は、筒部に貝殻復縁による羽状文の下段（上段は欠いている）とその下に平行沈線文が施してある。磨滅が激しい。38-9は筒部に平行沈線文が施してあり、脚部外面には平行沈線文ではなくナデが施してある。36-10は筒部がほとんどなく「C」字状に屈曲する。脚部外面には平行沈線文ではなく、ナデが施してある。

特異な土器

36-11～15は在地土器の器形とは異なるものである。36-11は壺の頸部と考えられ、長さ約5cmの直立する頸部である。頸部径12.4cmを測り、器壁が1.4cmと厚い。色調はにぶい黄褐色をなし、在地土器の色調と異なる。磨滅が激しく、胎土は長石を多く含む粗いものである。

36-12は壺の胴部最大径付近の破片で、三角形の2条の突帯が巡らしてある。突帯間に羽状文が施してあり、もう1条上に突帯があったと考えられる。この土器は色調・胎土は在地土器と同じであることから、吉備の特殊壺を模倣して在地の人が作った模倣土器と考えられる。

36-13は高坏の坏部片である。湾状の坏部で、内外面とも丁寧なナデが施してある。色調はにぶい黄橙色で、胎土も精製された丁寧な作りである。在地の器形とは異なるため、北陸系の高坏の模倣土器と考えられる。

36-14・15は器台の脚部の破片で、器形は吉備型の器台を模倣した土器である。36-14は脚部で、下垂した部分は剥がれています。外面には羽状文が、内面にはハケメが施してある。色調は橙色をなす。36-15は在地土器の胎土と同じである。全体に磨滅が激しい。

吉備の特殊壺

図37～図40は吉備の特殊壺である。37-1は頸部から底部までの破片で口縁部を欠く。残存高29.8cm、胴部最大径28.8cmを測る完形に近い土器である。頸部は「ハ」字状に開きながら胴部にむかい、胴部はタマネギ形で、底部はくびれず立ち上がる平底をなす。胴部最大径付近には3条の突帯が巡っている。頸部外面には胴部の境までらせん状に21条の沈線文が施してあり、その下に右上がりの列点文が施してある。一番上の突帯の上には沈線文が巡っている。突帯は方形をなし、突帯の上面にも沈線文が施してある。一番下の3番目の突帯は、胴部下半とつながって明確な段をなさない。全体に磨滅が激しいが外面には丹が塗られ、内面にはケズリが施してある。色調は、にぶい黄褐色をなし胎土は吉備のものである。37-2は4片からなるが同一個体と考え復元図を作成した。口径約26cm、器高約38.8cm、胴部最大径約32cmを測る。口縁部以外は、37-1と同じ器形をなす。頸部から強く屈曲し逆「ハ」字状に開き、直立する複合口縁をなす。口縁端部は面をなし外方につまみ出され、1次口縁と2次口縁の接合部は大きく突出している。2次口縁部外面には9条の沈線文を施した後、上下2段にわたり向きを変えた鋸歯文が施してある。頸部はタテハケメをした後に21条の沈線文を施したことわかる。上段の突帯の上には3条の沈線文、その上に列点文が施してある。突帯間に山形文状の文様が施してある。外面と口縁部内面には丹塗りが施してあり、色調はにぶい褐色をなす。頸部内面～底部にかけてケズリが施してある。今回出土した壺は37-1・2のような器形がほとんどで、

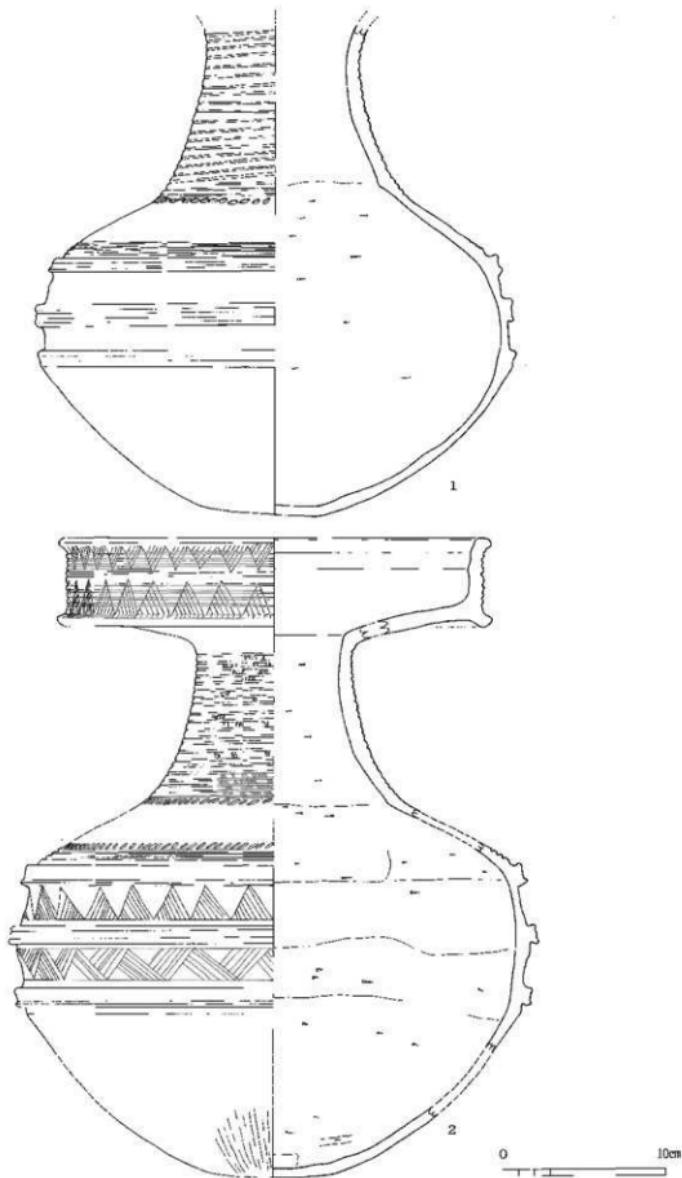


図37 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(4)(1:3)

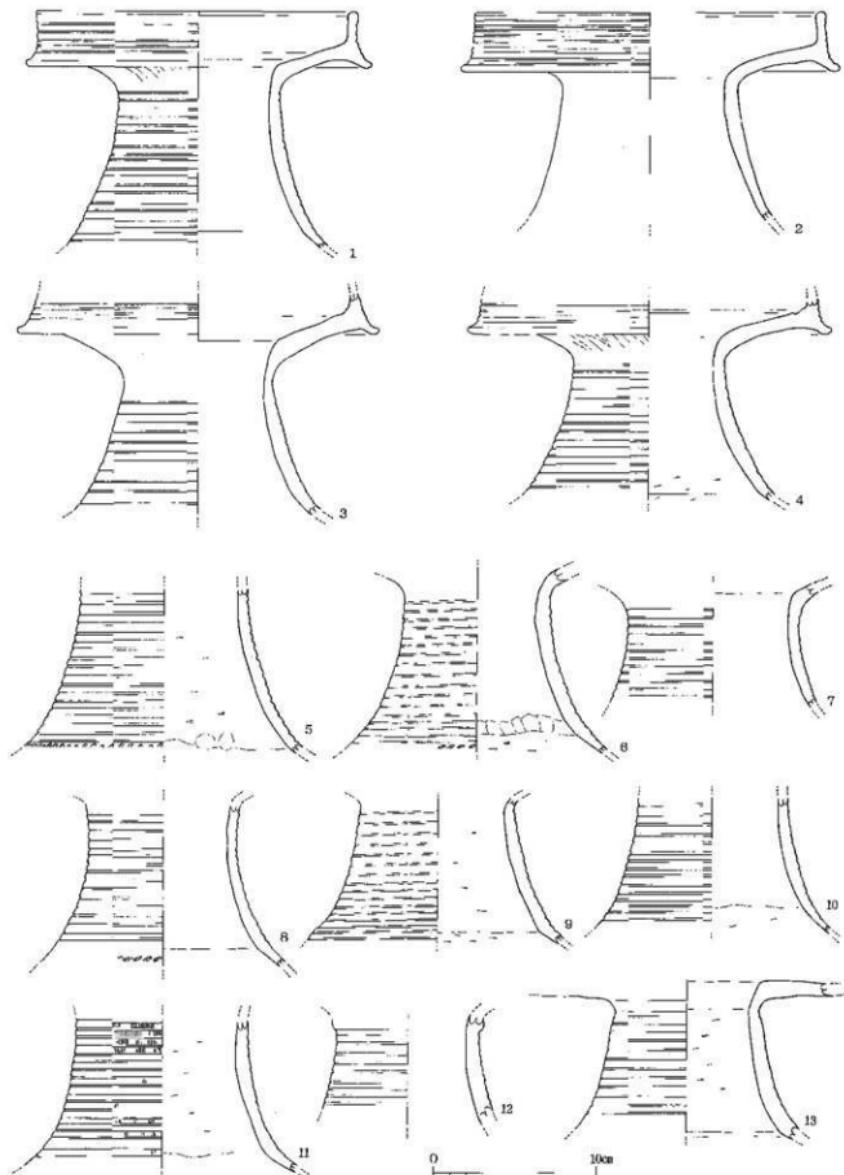


図38 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(5) (1:3)

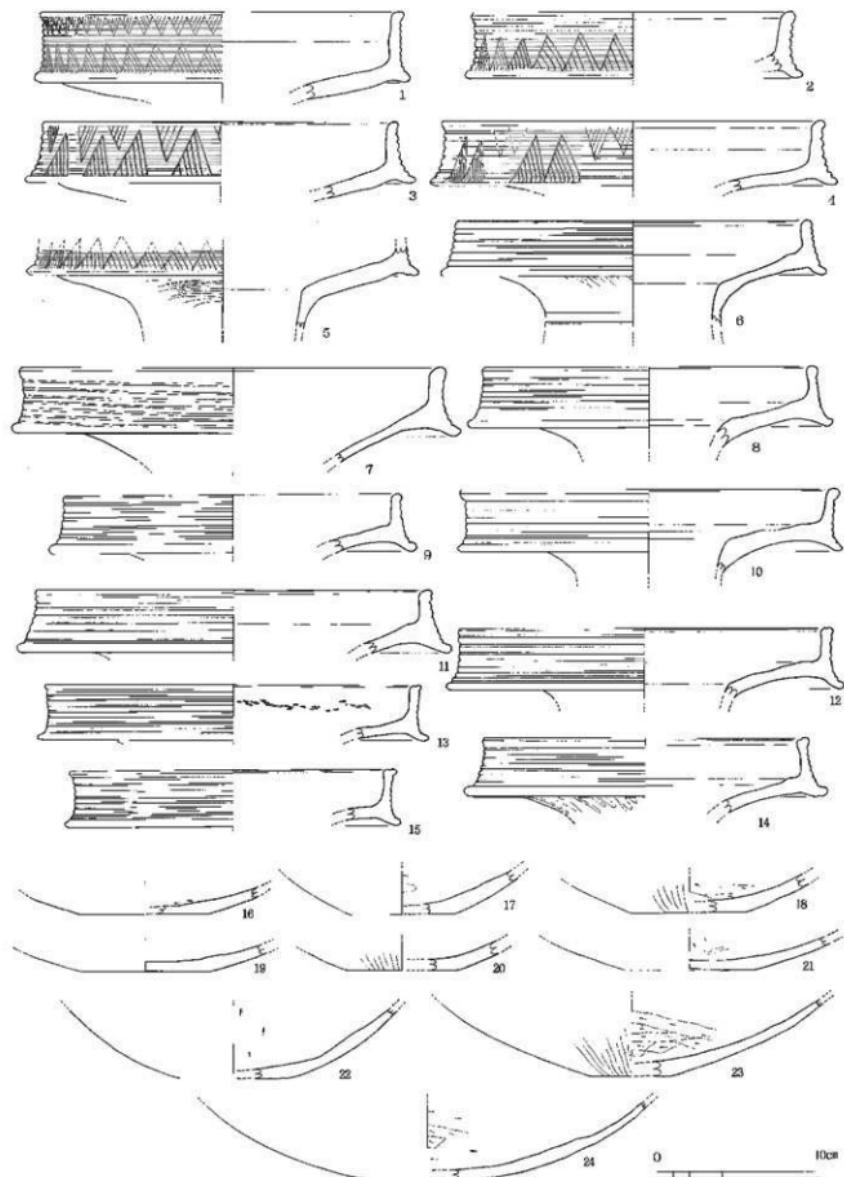


図39 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(6)(1:3)

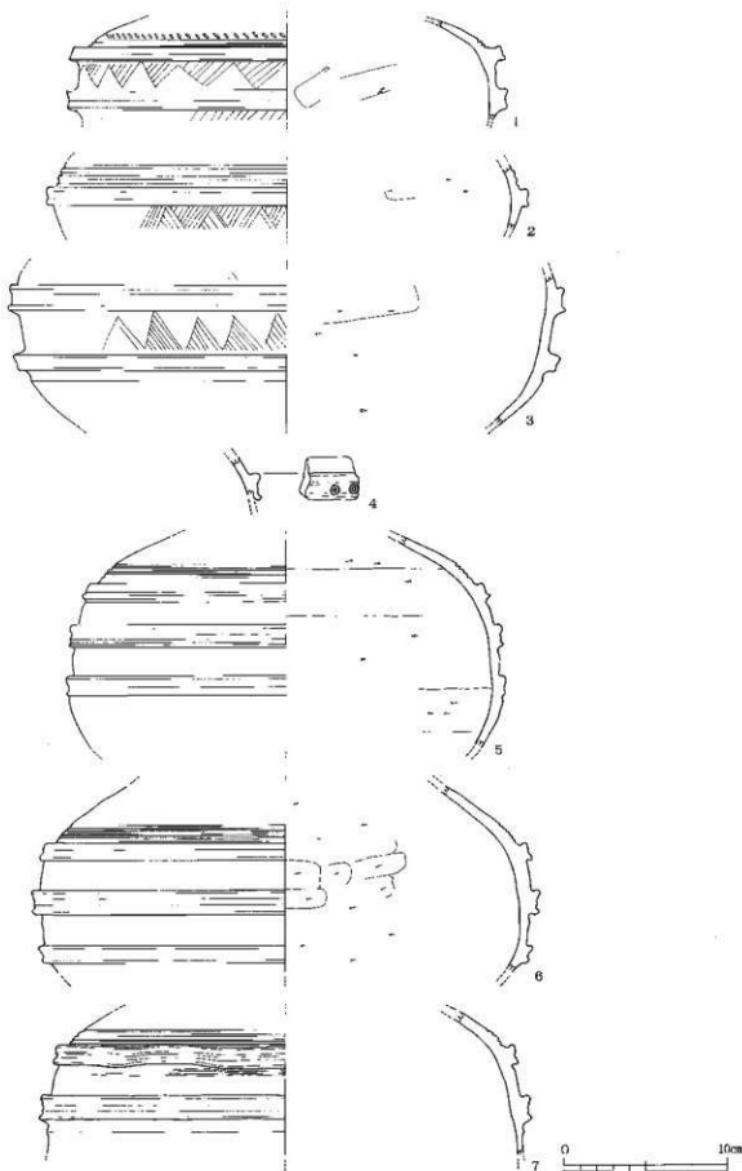


図40 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(7)(1:3)

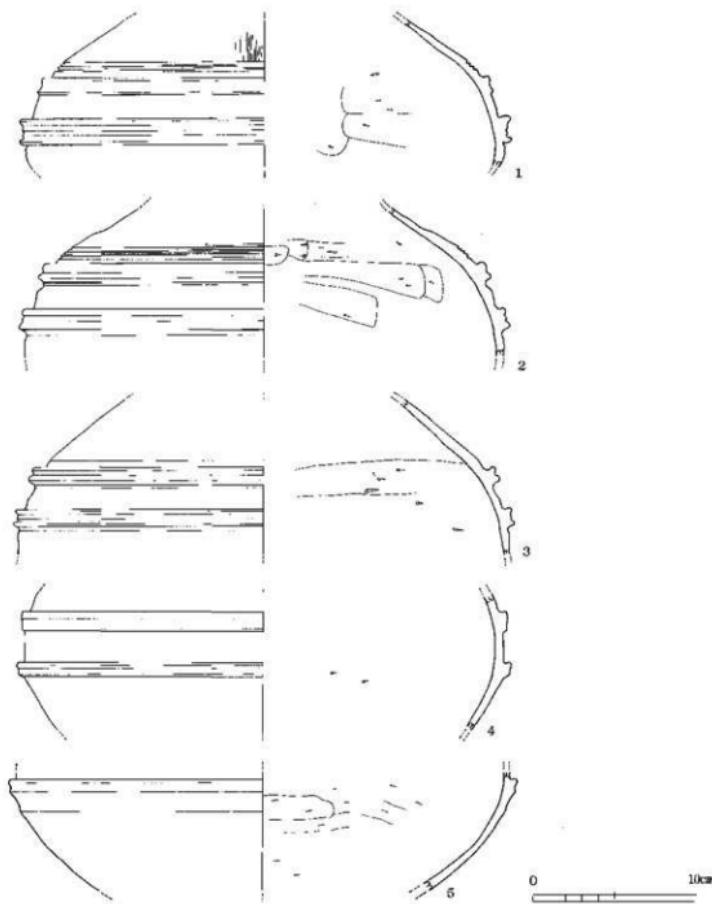


図41 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(8)(1:3)

鋸歯文などの文様を施すものと、施していないものがあり、前者は少なく後者が多いようである。

38-1~4は口縁部から頸部の破片で、口径は20cm前後のものである。いずれも磨滅が激しい。38-2は磨滅が激しいため沈線文が残っていない。

38-5~13は頸部片である。頸部最小径は9cm~10cm程度で、長さも10cm程度ではほぼ同じ大きさである。全面に磨滅が激しく、外面の平行沈線文の正確な本数の確認は難しい。38-13は口縁部が頸部から垂平に開くものである。焼成不良のため外面の剥離が激しい。

39-1~15は口縁部片である。吉備型器台の口縁と器形がほぼ同じであるため、器形から壺の口縁

と判断することはできないが、頸部との接合部の長径が 10cm 前後になるため壺の口縁と判断した。口径は $19\text{cm} \sim 26\text{cm}$ 程度のもので、 22cm 前後のものが多い。39-1～5は口縁部外面に鋸歯文が施してあるもので、鋸歯文のパターンは39-1～4の4種類である。39-6～15は口縁部外面に文様ではなく沈線文のみが施してある。39-6～10は口縁端部を丸くおさめ、39-11～15は口縁端部上面が面をなし、沈線文を1条施してあるものがある。39-13は口縁内面に調整時の爪のような跡が残る。

39-16～24は底部片で、底径が $5 \sim 7\text{cm}$ を測る。器形は平底でくびれず立ちあがる。39-24は丸底に近いものである。確実に底部穿孔が施してあるといえるものは無い。全体に磨滅が激しく、外面はミガキ、内面はケズリが施してある。

図40～図41は胴部の破片である。胴部最大径は $26\text{cm} \sim 34\text{cm}$ 程度のものがあり、 30cm 程度のものがほとんどである。突帯は3条施してあるものがほとんどである。器形はタマネギ形をなすものがほとんどで、40-1だけは一番上の突帯から強く屈曲し頸部に向う。突帯間に鋸歯文が施してあるが、その種類は37-2と40-1～3の4パターンある。また、40-4は2番目の突帯と考えられるもので、突帯の上面に沈線文を施した後に竹管文が施してある。特殊壺・特殊器台に竹管文が施してある例は西谷4号墓にあるだけの珍しい文様で、特別に出雲の被葬者のために吉備で作った上器という説がある。今回西谷2号墓から出土したこの土器も特注で作った可能性が考えられる。40-5～図41は突帯間に文様が施していないものである。

吉備の器台

図42～45は吉備の器台で、西谷2号墓からは吉備の特殊器台は出土していない。42-1は筒部から脚部にかけての一部を欠く2片からなり、接合はしないが同一個体と判断し復元図を作成した。口径 28.8cm 、復元高 29.6cm 、筒部最少径 15.4cm を測る。筒部は口縁部との接合部がすぼまる「ハ」字状をなし、口縁部は逆「ハ」状に開き、複合口縁をなす。脚部は「ハ」字状に大きく開き、直立部をもつ。直立部の接合部には突帯が巡る。口縁部外面には10条の沈線文が、筒部には沈線文と列点文の文様帯が3段あり、文様帯間に方形透かしが2段4方向にある。脚部突起の上には沈線文、その上に列点文が施してある。外面と口縁部内面には丹が塗られており、口縁部外面にはミガキ、内面の筒部～脚部にはケズリが施してある。色調は褐色をなす。胎土は吉備のものである。42-2は口縁部と筒部が接合していないが、同一個体と判断して図面を作成した。器形は42-1とほぼ同じである。口径 25.4cm 、器高 28cm 、筒部最少径 15cm を測る。胎土に 8mm 程度の大きな長石を含む。43-1は口縁部と筒部と脚部の3片からなるもので、接合はしないが同一個体と判断し復元図を作成した。口径 30.4cm 、復元高約 36.2cm 、筒部最少径約 13cm を測る。42-1・2と器形はほぼ同じであるが、それよりは高さがあり、筒部はやや細い。口縁部外面に沈線文を施した後に鋸歯文が上に向かい合うように施してあり、脚部の沈線文の上方にも鋸歯文が施してある。西谷2号墓出土の吉備の器台は42-1・2と43-1のようなタイプがほとんどである。

43-2と3は筒部の破片で、43-2は筒部最少径が約 13cm で43-1とほぼ同じ器形であるため、43-1の復元に参考とした。今回出土した器台の筒部最少径は $13\text{cm} \sim 15\text{cm}$ 程度である。

43-4～図41は脚部の破片である。脚部最大径は $32.2\text{cm} \sim 43.2\text{cm}$ 程度で、 $34 \sim 35\text{cm}$ 程度のものが多い。全体的に磨滅が激しい。43-4は脚部の沈線文の上方に鋸歯文が施してあり、器壁も 8mm と厚い。

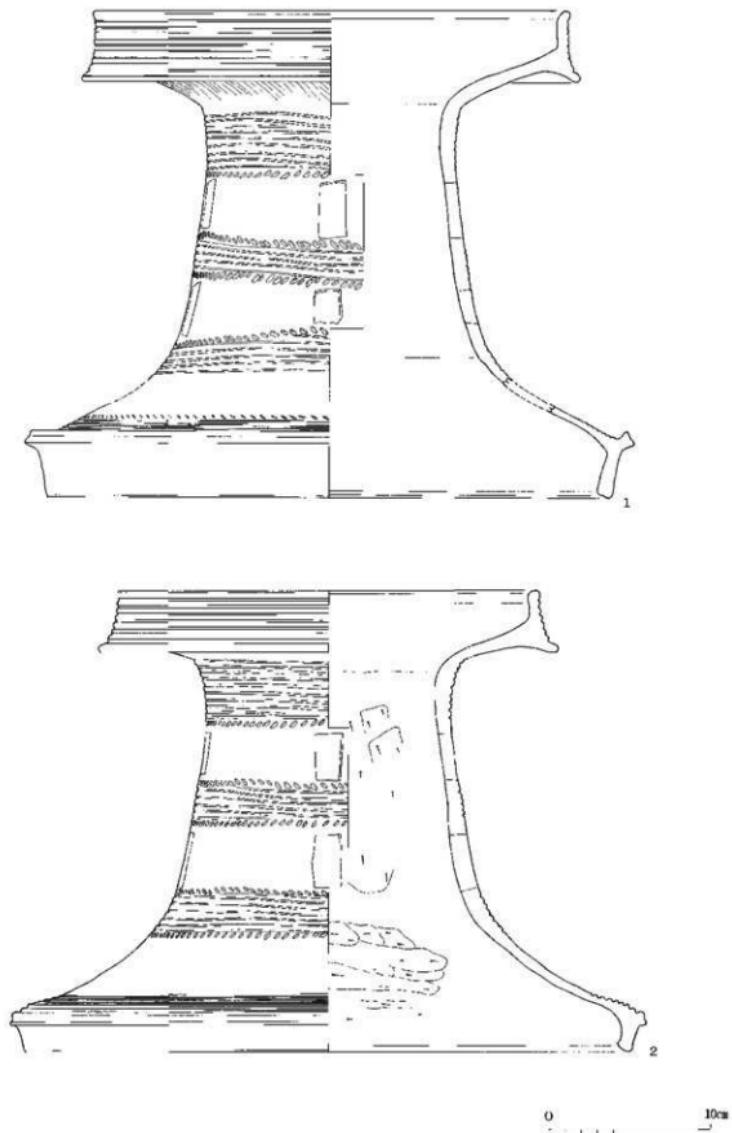


図42 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(9)(1:3)

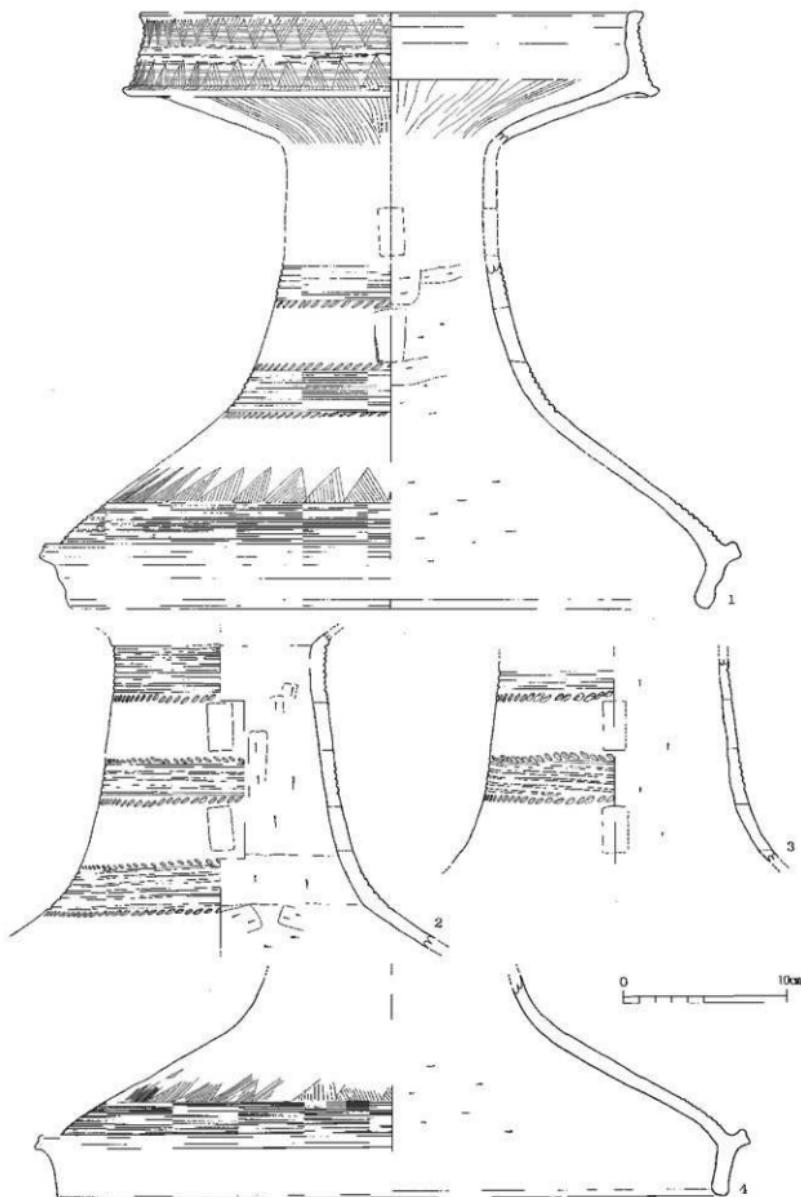


図43 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(10) (1:3)

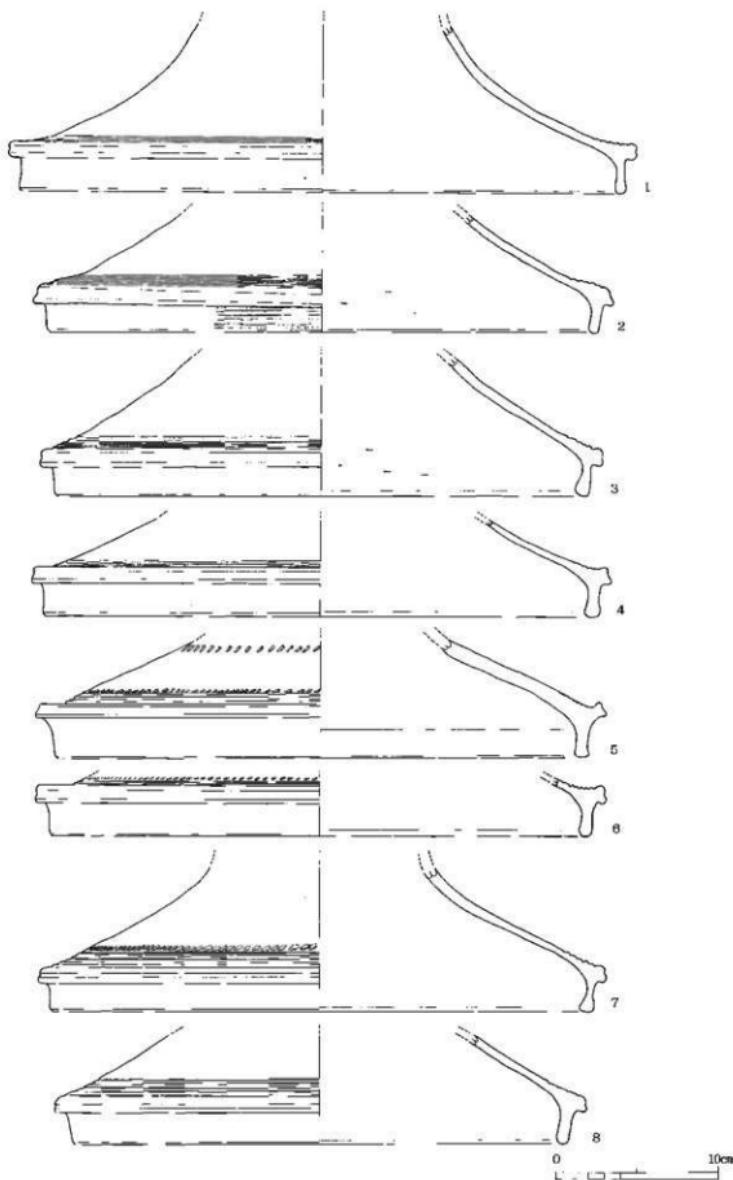


図44 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(11)(1:3)

43-1と似たタイプである。44-2は直立部外面にも沈線文が巡っている。

図45は器台の口縁部の可能性があるものである。器形からは特殊壺の口縁との区別は難しいが、内径が25cm以上で筒部との接合部の径が12cm以上のものをあげている。口径は25cm~30.4cm程度のものである。口縁部外面には沈線文が施してあり、鋸歯文が施してあるのは43-1のみである。45-5は2次口縁部が他の口縁部より5.8cmと長く、筒部から1次口縁が垂平に開く他の口縁とは変った器形をなす。

E 4・F 4 グリッド出土土器のまとめ

E 4・F 4 グリッド出土土器はすべて搅乱土からの出土であるが、西谷2号墓の中心埋葬主体に伴う遺物と推定できる。土器としては、在地土器、吉備の特殊壺と器台、吉備の特殊壺と器台を模倣した在地の土器が主なものである。在地土器の時期は、草田3期から4期のもので、弥生時代後葉～終末期の古段階にかけての時期と考えられる。吉備の土器は立坂型と考えられ、吉備からの搬入品である。ただ、特殊壺の尖端につけられた竹管文がどのような意味で施してあるのかはとても重要なことであり、他の搬入品とは異なる扱いが必要である。

墳丘墓から出土した土器の点数は重要であるが、搅乱土出土であるため、また、接合できない破片の数も多く正確な点数を報告することは難しい。また、別々に報告しているが、同一個体である可能性もある。そこで、およその数字をあげ、それ以上は確実にあるということにしたい。ここにあげた数字は1998年調査分も含む。

壺・・・10点 鼓形器台・・・15点 低脚壺・・・13点 高壺・・・2点

模倣土器・・・5点

吉備特殊壺・・・15点 吉備の器台・・・13点

以上のような、点数をあげることができる。おおまかにまとめると在地土器（高壺以外）も吉備の土器もそれぞれ15点は確実にあると考えられ、合わせると、在地土器が45点+2点（高壺）、模倣土器5点、吉備の土器が30点で総数82点は確実にある。まだまだ、破片が多くあるので総数で100点近くはあると推定できる。

ガラス鏡

46-1～4はガラス鏡である。F 4 グリッドの土器が集中して出土する付近から出土していて、西谷2号墓の中心埋葬主体に伴う遺物と考えられる。また、出土時には朱が付着していたものもあり、棺内にあたったと考えられる。46-1～3は内径5.7cmを測る。風化が激しく白色化しているが、破面はエメラルドグリーンをしている。材質はバリウムを含まない鉛ガラスである。破面観察から気泡が多く残っていて雑な作りであることがわかる。詳細は分析編で報告する。46-1は全体の1/8を欠いている。断面形が「D」形をなすもので厚さは9mmで厚い。46-2は1/3を欠いている。46-1と同じく断面「D」形をなし、接合痕がある。46-3は1/2を欠いている。46-1・2よりは厚さが薄く7mm～3mm程度であり、厚さが一定ではなく、断面形態も曖昧な形である。46-4はガラス鏡の1/8程度の破片で、断面形態が「D」形をしていない曖昧な形態である。したがって、46-3と同一の可能性が考えられるが、接合しないため別の個体の可能性もある。

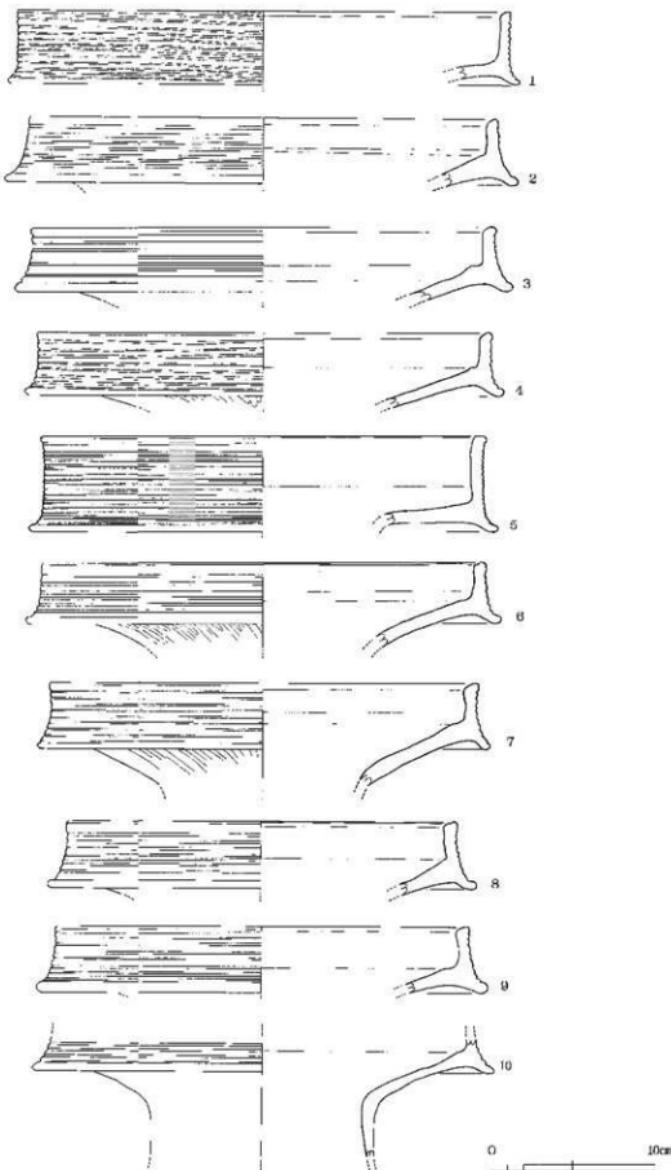


図45 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(12)(1:3)

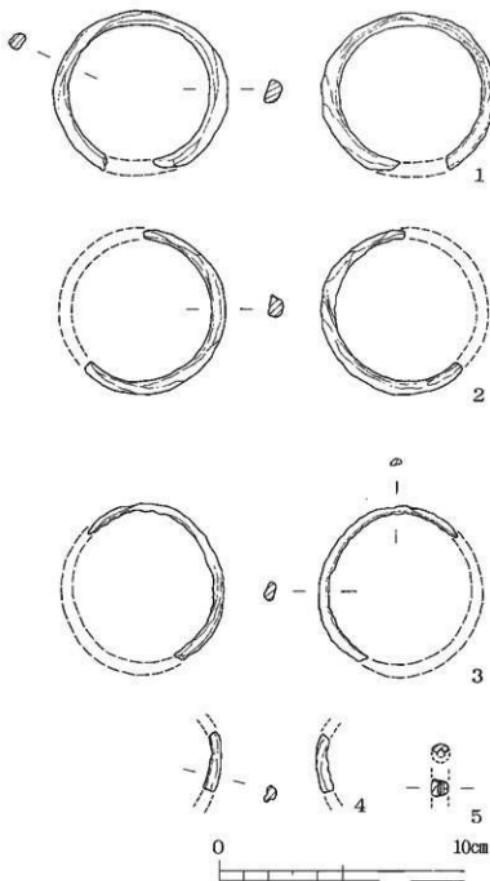


図46 2号墓E4・F4グリッド出土ガラス剣・管玉(13)(1:2)

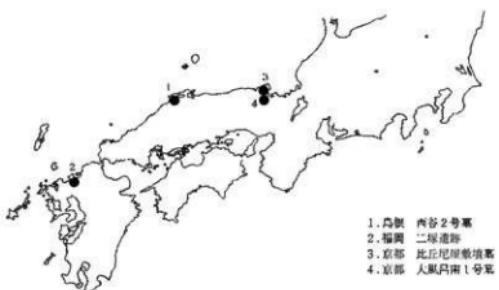


図47 日本におけるガラス剣出土地

ガラス剣は日本で西谷2号墓の他に3遺跡で出土していて、いずれも弥生時代後期後半頃のものと考えられている(図47)。京都府比丘尼屋敷墳墓出土のガラス剣と福岡県二塚遺跡出土のガラス剣は西谷2号墓と同じエメラルドグリーンをしていて、分析の結果、二塚遺跡出土品と西谷2号墓ガラス剣はほぼ同じ材質であることがわかった。

このガラス剣は中国あるいはベトナムなどの大陸で製作されたもので北部九州を経由して入手したと推定できよう。雑なつくりであるが、細く大きなガラスであることから、かなり高い技術で造られている。

接合痕があることから巻き付けて製作したと考えられる。

ガラス管玉

46-5はガラス管玉の破片で、残存長7mm、復元幅9mm、厚さ3mm、孔径3mmを測る。かなり崩壊しており半裁した状況で出土している。他にも粒状に碎けた破片も出土しているが、実測可能なものはこれ1点のみである。ガラス剣と同じく土器が集中して出土する付近から出土していて、西谷2号墓の中心埋葬主体に伴う遺物と考えられ、また、孔の表面に朱が付着していることから、棺内にあったと推定できる。

材質は中国で造られたソーダ石灰ガラスで、類例として西谷3号墓の管玉、福岡県平原1号墓の連玉があり、弥生時代としてはとても珍しい。

朱

朱は土器が集中して出土する付近から出土していて、西谷2号墓の中心埋葬主体（第2主体）の棺底に置かれたものと考えられる。朱は散在した状況で出土したため、周りの土と一緒に取り上げ室内で選別した。出土量はおよそ3kg（土も含む）である。この選別の際にガラス管玉の小片を発見した。朱は中国産の水銀朱と考えられる。

G1・3グリッド出土及び表探土器

図48-1と2はG3グリッドの残丘岸面精査時に出土したもので、第1主体付近の盛土から出土していて、第1主体に伴う遺物と考えられる。48-1は複合口縁をなす壺の口縁部で口径約15cmを測る。48-2は鼓形器台の器受部片で、口縁端部を欠いている。口縁外面に列点文状の文様を施す、在地の鼓形器台としては珍しい施文である。48-3は残丘部の墳頂から表探した低脚壺の接合部の破片である。48-4～11はG1とG3グリッドから出土したもので、擾乱土及び流土から出土し、元位置を留めていないものである。48-4は壺の口縁部片で口径約29cmを測る大型品である。48-5は低脚壺、48-6は鼓形器台の脚部である。48-7は壺の頸部あるいは器台の筒部の破片で、外面に三角形突帯が巡っている在地土器にはみられない特徴を持つ。他地域の模倣土器の可能性が高い。48-8は器台の脚部片で直立部をもつ。胎土は在地のもので吉備の器台を模倣した土器である。48-9～11は壺の胴部最大径部分の破片で、外面に2条あるいは3条の突帯が巡り、その上面に羽状文が施してある。内面は、ハケメが施してあり、在地の器面調整の手法とは異なる。胎土は在地ものである。48-12は出雲考古学研究会が残丘部の崖面より表探したもので、既に報告されている。壺の口縁部片で、口縁外面中央に1条の突帯が巡り、その上面に羽状文が施してある。在地土器としては珍しく、48-9～11のような胴部の上に、48-12の口縁がつく壺と想定している。この土器は吉備の特殊壺の器形を模倣し、在地土器によく使われる文様である羽状文を施し、内面調整は西部瀬戸内あるいは北部九州で

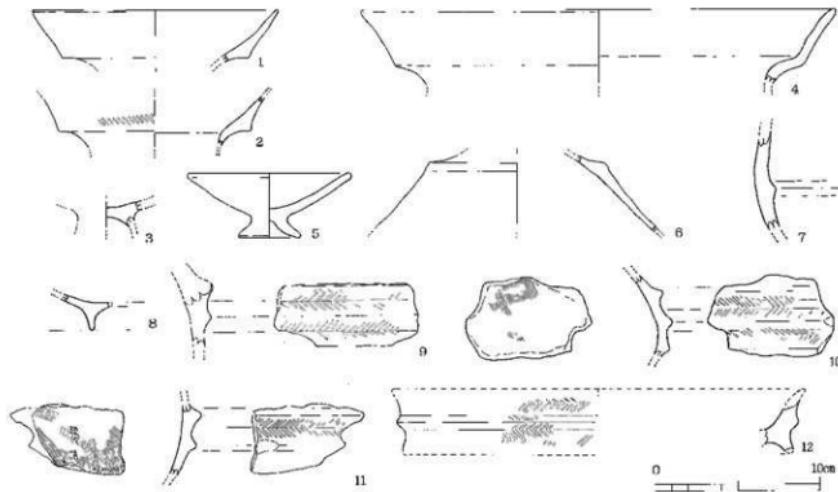


図48 2号墓G1・3グリッド出土及び表探土器（1:3）

みられるハケメが施してあり、各地の土器の特徴を折衷させて作った、祭祀用の土器と考えられる。このような土器は西谷3号墓第1主体からも出土している。G1・3グリッド出土土器は第1主体部の近くで出土しているため、第1主体に伴う土器の可能性が高い。

7. 西谷2号墓の調査成果

西谷2号墓は四隅突出型墳丘墓で、南北36m×東西24m、高さ3.5m、突出部を含めると約50mの大型の墳丘墓で、時期は弥生時代後期後葉～終末期後段階と考えられる。墳丘は地山を削り出した後に、部分的に盛土をして、墳丘表面に石を並べている。配石構造は斜面に貼石を行い、墳裾は2段の敷石・立石が墳丘全体を巡る。墳丘築造過程の中で、埋葬施設の作成がいつ行われたかということが問題になる。墳丘の配石が行われる前か、配石終了後かという問題となるが、今回の調査ではそれを解明する情報を得ることはできなかった。

西谷2号墓は採土により墳丘の3/4が破壊されている状況である。そのため、墳丘の短軸にはほぼ平行に崖面ができていて、墳丘の断面観察ができる状況である。その崖面を精査し断面観察を行った結果、大型の埋葬施設を確認し、これを第1主体とした。第1主体は崖断面上で掘り込み面の長さ4.3m、底面の長さ2.8mを測る大型の2段掘り墓域である。底面には砂利が敷かれ朱も確認できた。既に詳述したように、墓域内に据えられていたのが木棺なのか木棺を納めた木桶なのかは確証が得られなかつたが、いずれにしてもかなり大型のものであることは確かである。第1主体は西谷2号墓の端の部分にあることから周辺埋葬と考えられるので、既に破壊されている中心主体は第1主体と同じかそれ以上の規模を持つと考えられる。

中央トレンチでは、攪乱された土の中からではあるが多数の土器のほかガラス製品や朱塊が検出された。木米、このあたりのどこかに第1主体とは別の埋葬施設、すなわち第2主体があったものと推定されるが、これらが出土した位置及びガラス剣という希少性の高い遺物の存在から考えて、この第2主体こそ2号墓の中心主体だったと考えてよいであろう。遺物は攪乱土や流土から出土したもののがほとんどである。これらは、それほど遠くに移動しているとは考えにくいため、出土位置から、中心主体（第2主体）に伴うものか第1主体に伴うものを判断して掲載した。中心主体に伴うものは、土器、鉛ガラスの剣、ソーダ石灰ガラスの管玉、朱である。土器は100点近くが伴うと考えられ、在地の上器に加え、吉備の特殊系や器台も多く搬入している。また、吉備の模倣土器も出土している。ガラス剣、ガラス管玉、朱は舶来品と考えられる。

西谷2号墓は墳丘の3/4が破壊されているが、多くの情報を得ることができた。興味深いのは、西谷2号墓と西谷3号墓の組成が良く似ていることである。それは西谷3号墓も、2段の敷石・立石構造を備え、吉備の土器を含む大量の土器を出土し、副葬品には鉛ガラスの小玉類、ソーダ石灰ガラスの管玉などが多数含まれていた⁽¹⁾。

墳形がかなりわかつたため、西谷3号墓や他の四隅突出型墳丘墓を参考に西谷2号墓の復元図を作成した（図49）。突出部の長さは西谷1号墓の南東突出部を参考にしている。やや狭い墳頂平坦面であるが、墳形はかなり整ったものである。

(1) 三浦清・渡辺貞吉「山陰地方における弥生墳丘墓出土の玉材について—西谷3号墓出土品を中心にして—」『島根考古学年報』5、1988

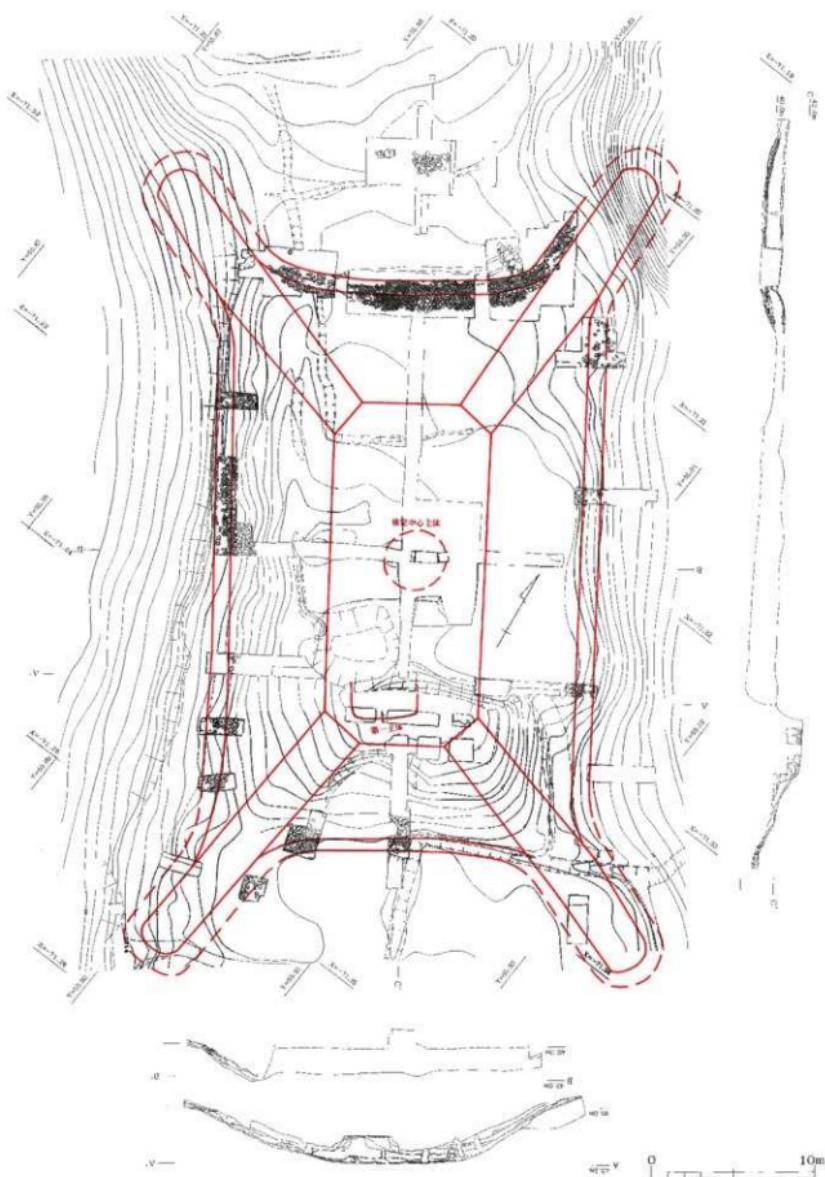
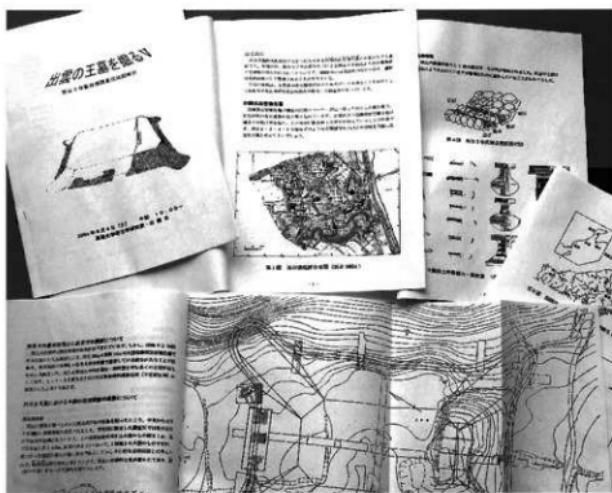


図49 2号墓復元図（1:300）



現地説明会資料



発掘調査参加者



2号墓 調査中（北から）



2号墓 残丘調査状況
(真上から)



2号墓 第1主体検出状況
(真上から)

図版2



2号墓 第1主体断面
(北から)



2号墓 中央トレンチ
(南から)



2号墓 J2トレンチ
(南から)



2号墓 G 1・2 トレンチ（西から）



2号墓 E 1 トレンチ（西から）



2号墓 G 5・6 トレンチ（東から）



2号墓 A 2～4 グリッド（北から）

図版 4

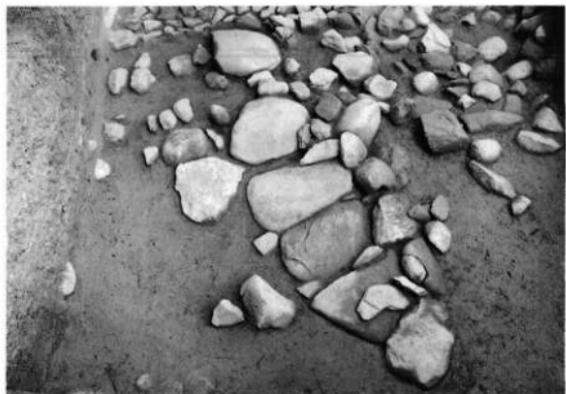




2号墓 北端（真上から）



2号墓 A5トレンチ
(北から)



2号墓 集石遺構①
(北から)

図版 6



2号墓 集石遺構①(北から)



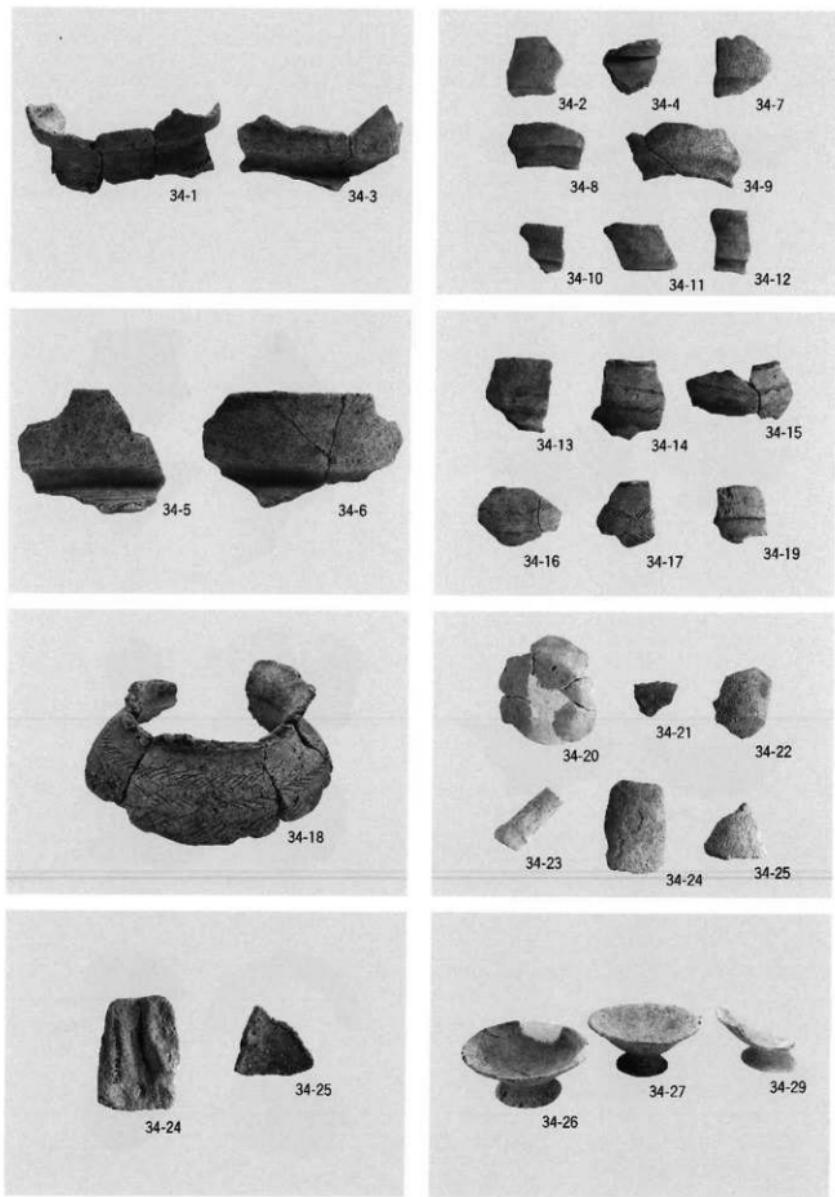
2号墓 集石遺構②・③(西から)



2号墓 集石遺構②(東から)

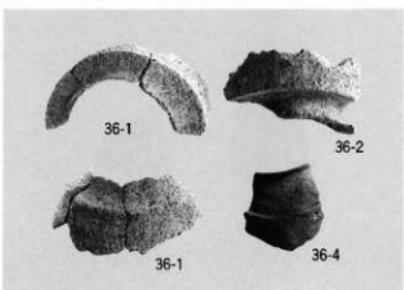
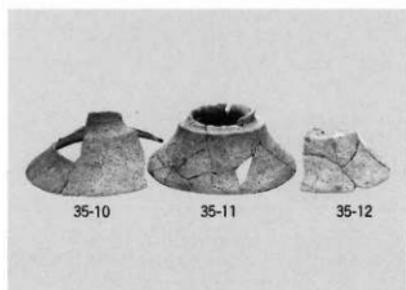
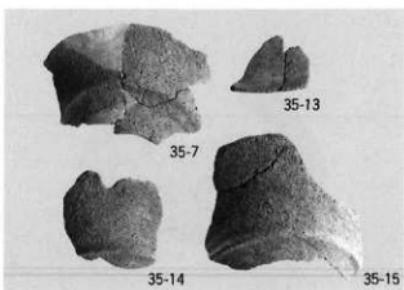
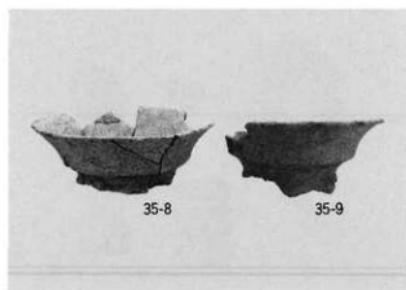
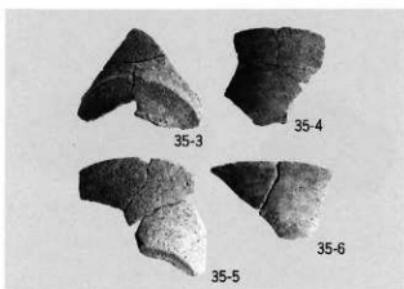
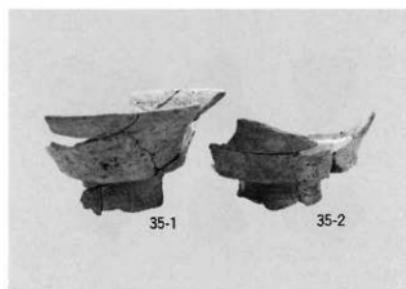
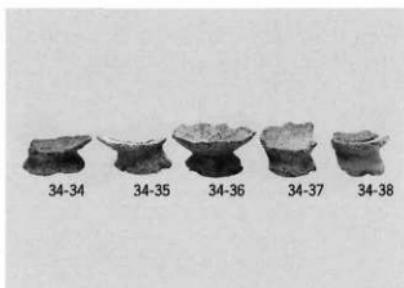
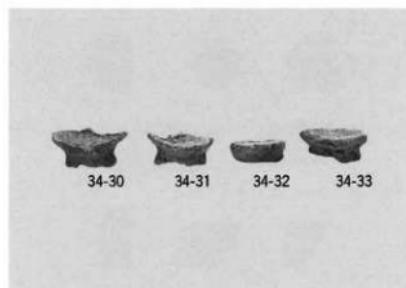


2号墓 集石遺構③(東から)

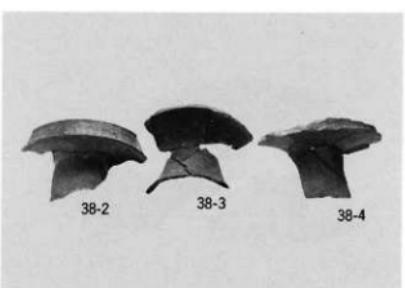
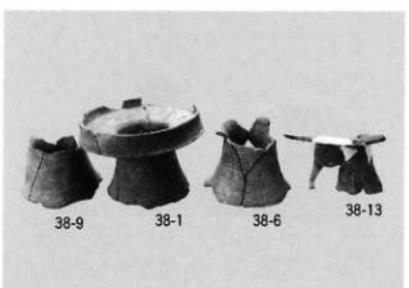
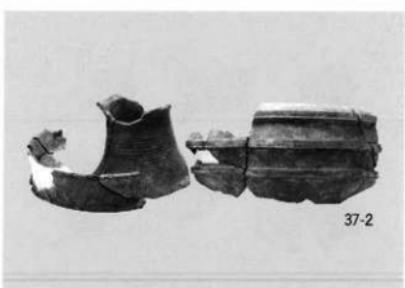
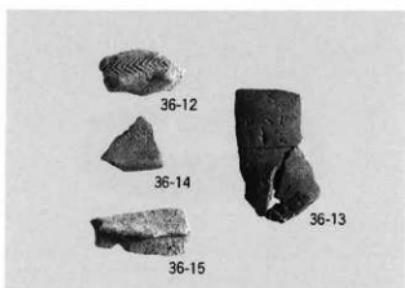
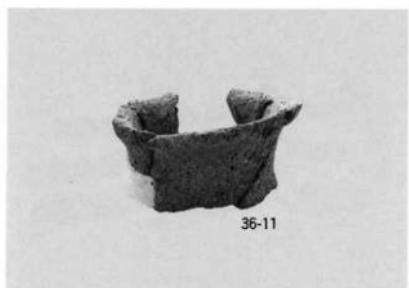
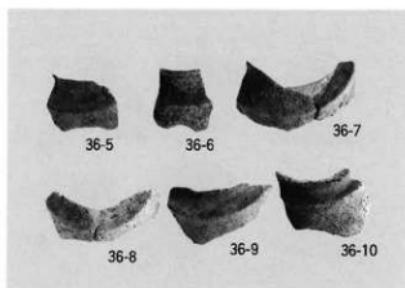
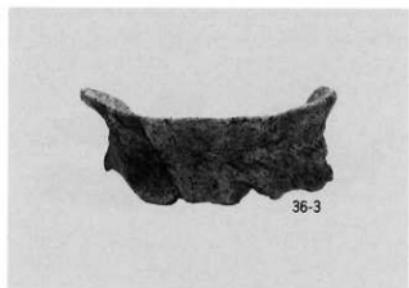


2号墓 出土土器

図版8

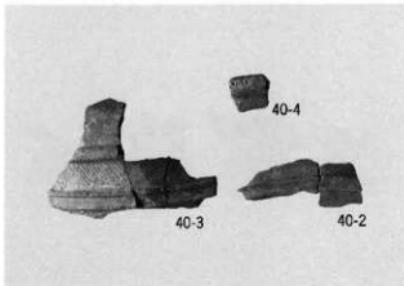
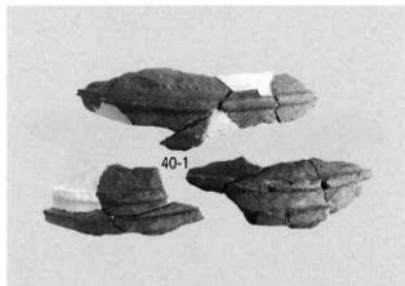
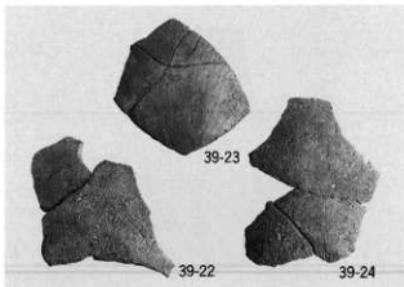
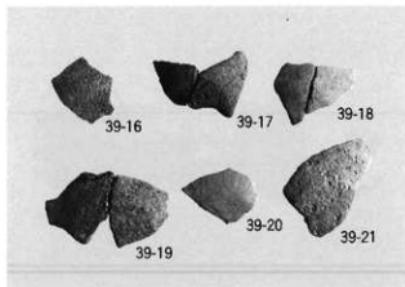
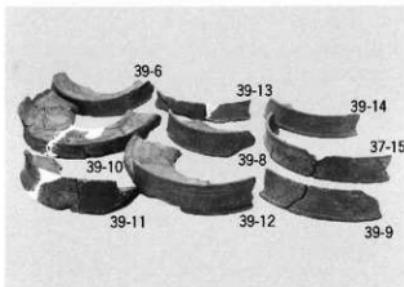
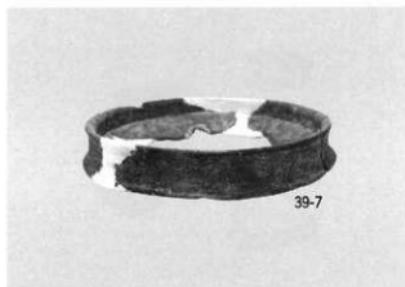
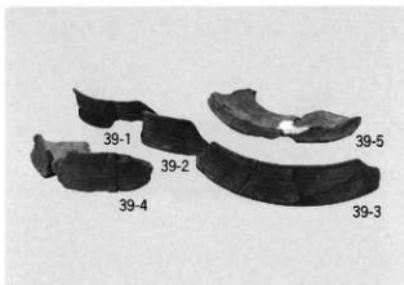
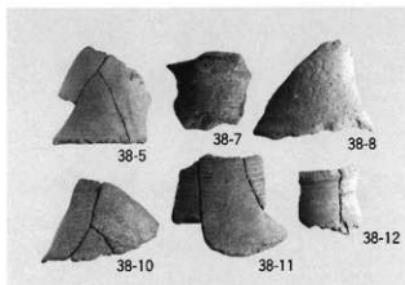


2号墓 出土土器

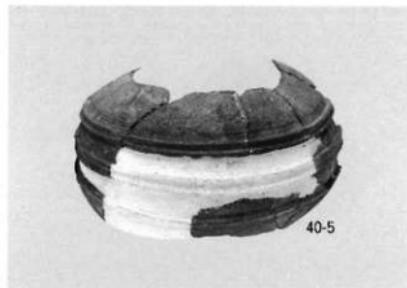


2号墓 出土土器

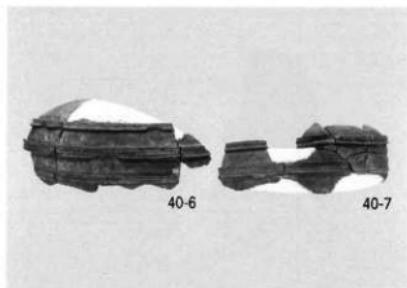
図版10



2号墓 出出土器

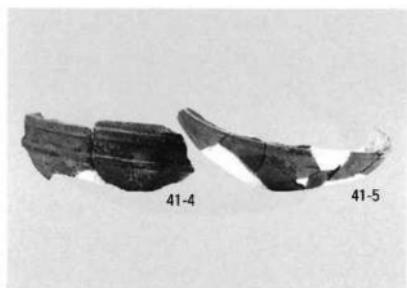


40-5



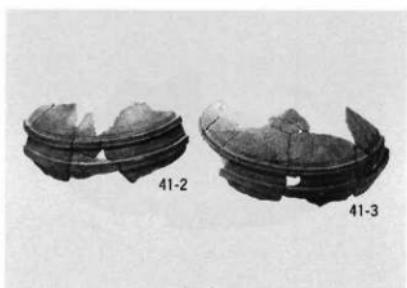
40-6

40-7



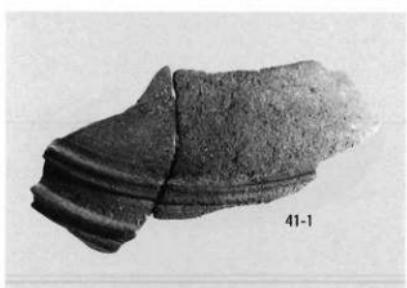
41-4

41-5



41-2

41-3



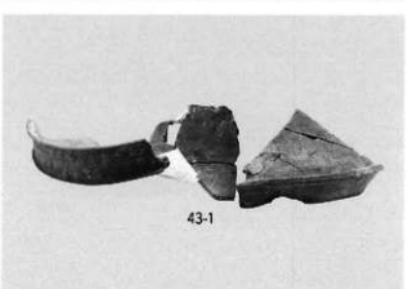
41-1



42-1



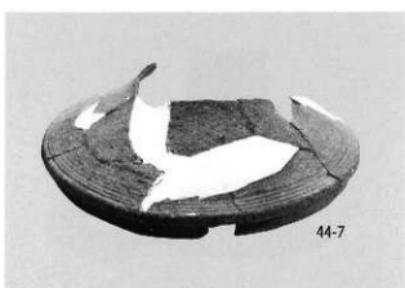
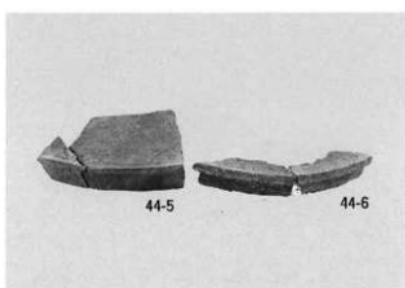
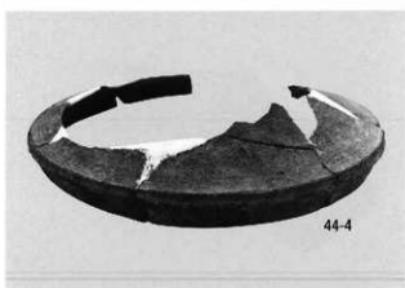
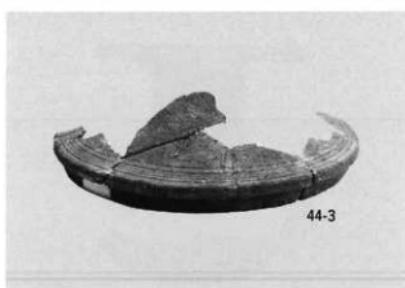
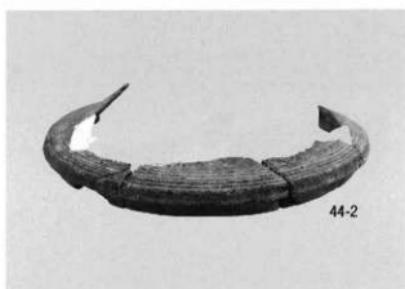
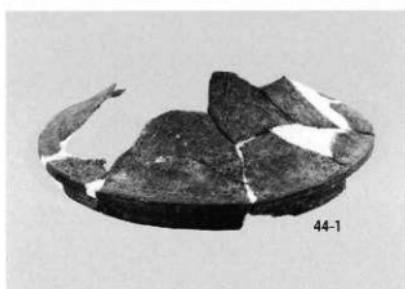
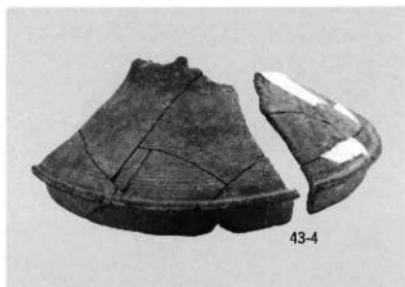
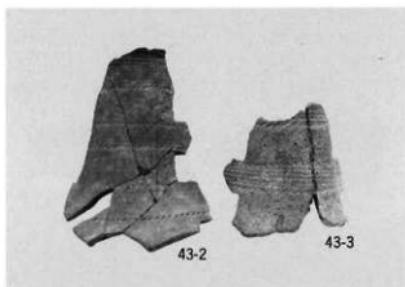
42-2



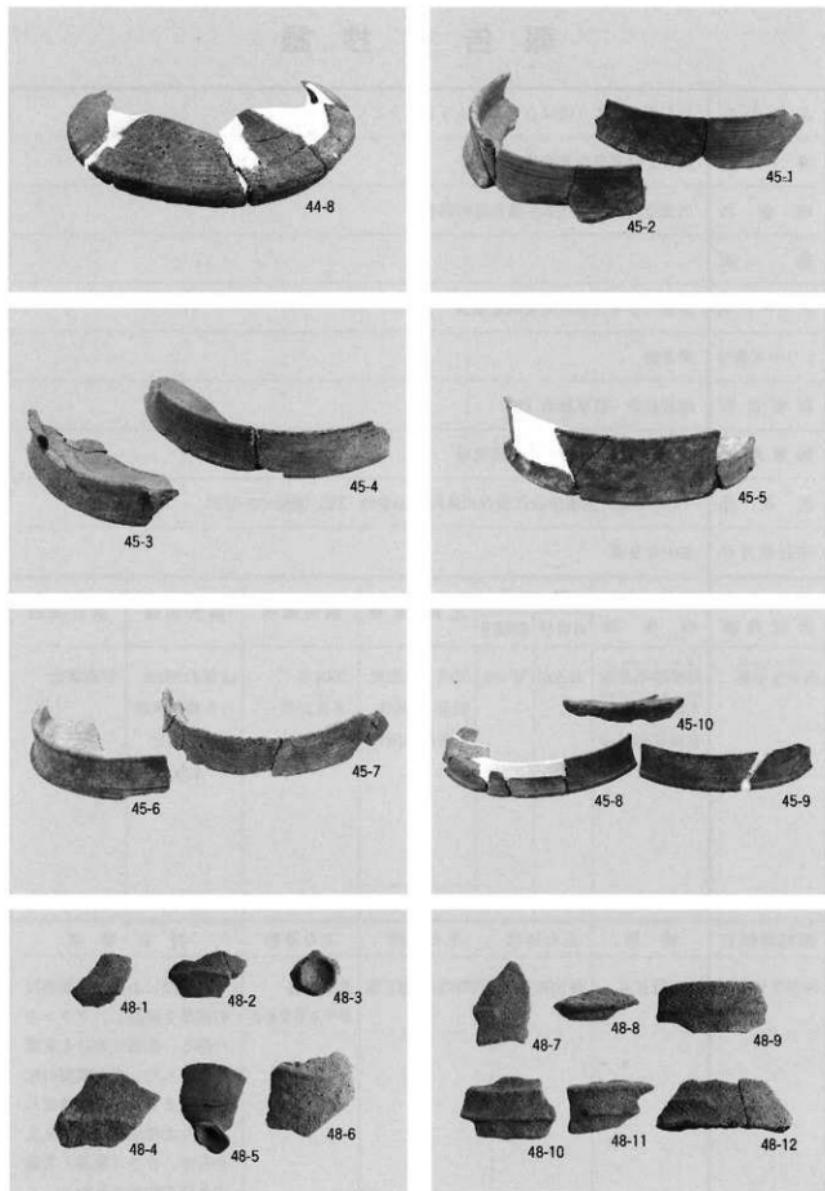
43-1

2号墓 出土土器

图版12



2号墓 出土土器



2号墓 出土土器

報告書抄録

ふりがな	にしだににごうほはっくつちょうさほうこく						
書名	西谷2号墓発掘調査報告						
副書名	出雲市大津町所在弥生墳丘墓の調査						
卷次							
シリーズ名	島根大学考古学研究室調査報告						
シリーズ番号	第8冊						
編著者名	渡辺貞幸・坂本豊治(編)						
編集機関	島根大学法文学部考古学研究室						
所在地	〒690-8504 島根県松江市西川津町1060番地 TEL 0852-32-6195						
発行年月日	2006年9月						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
にしだににごうほ 西谷2号墓	島根県出雲市 大津町下米原 字西谷3596-6 ほか	市町村 32203	W-92	35度 21分 33秒9	132度 46分 45秒7	2004年 8月23日～ 9月13日	全体約200m ² うち島根大学 分担分 約55m ²
				世界測地系			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西谷2号墓	弥生墳丘墓	弥生時代	四隅突出型墳丘墓	弥生土器 ガラス製装身具	残丘部において埋葬施設の痕跡を確認し、プランの一部と、岸面における断面を調査した。また墳裾の配石構造を各所で調査確認した。なお破壊部分の攪乱土から朱、ガラス製品、大量の土器が検出された。		

西谷2号墓発掘調査報告
出雲市大津町所在弥生墳丘墓の調査

平成18年（2006）9月発行

編集・発行 島根大学法文学部考古学研究室
出 雲 市 教 育 委 員 会
印刷・製本 有 限 会 社 西 村 印 刷
出 雲 市 灘 分 町 5 0 3 - 2